

パリの『郊外の若者の自由な発言』へのアプローチ —体系的分析と比較的分析の試み—

滝波章弘

I はじめに

1. フランスの郊外について

現代フランスのメディアは、郊外を暴力・麻薬・窃盗の場として伝える傾向が強いので、郊外にはマイナスイメージが生じている¹⁾。このマイナスイメージは、とりわけ暴動 *émeute* の報道のたびに増幅されてきた。主なものだけでも、1981 年と 1983 年のリヨン郊外ヴェニスューのマンガット地区での暴動、1990 年のリヨン郊外ヴォ=アン=ヴァンでの暴動、2005 年にパリ郊外クリシィ=スウ=ボワから全土に拡大した暴動、2007 年のパリ郊外ヴィリエル=ベルでの暴動、などが挙げられる。

日本でもフランス郊外の研究は増えているが、その中には郊外の危険性を示唆するものもある。磯(2013)はパリ郊外の脆弱な地区の柔道場に通り、自身が強襲される体験を 2 度しながら、貧しい地区で暴力は誰に向けてなぜ生じるのか、柔道は地区にどのような意義をもたらすのかなどを論じた。

しかし、フランスの郊外は本当に危険なのだろうか。いわゆる「移民系²⁾」の人々が最も多いとされる 93 県³⁾の場合を考えたい。人口 150 万の 93 県は、アメリカ・ニューヨーク市北部に位置する人口 140 万のブロンクスに喩えられるが、両者の 10 万人当たりの殺人件数を 2013 年で比べると、93 県 1.7 人（フランス本土 1.2 人）、ブロンクス 5.6 人（アメリカ全土 4.5 人）で、犯罪発生率が通りに比べて大きく異なるとしても、圧倒的に 93 県の方が少ない（Le Moigne, Smithsimon et Schafran, 2016）。また、アメリカでは、黒人系の親は、警察に尋問された際に殺されないで済む方法を子どもに教え、白人系の親は、問題が起きれば警察を呼ぶよう子どもに教えるというが、93 県では黒人系の若者と警官との間に緊張はあるものの、黒人系の若者が警官にユーモアのからかいや冗談を言い、警官との関係を制御することも珍しくない（Le Moigne, Smithsimon et Schafran, 2016）。ただし、この比較はやや特殊で、黒人系の血を引くオバマ大統領が誕生するアメリカと、そうした兆候のないフランスの差も忘れてはいけない。

別の視点もある。ボルドー郊外の脆弱なオビエ団地を扱ったジャクマンの論文を紹介したい。当該団地は、2001 年に 10 歳のモロッコ系少年が、名前からスペイン系と推測される性犯罪者の犠牲になったり、2002 年には住民の暴動があったりで、メディアから危険視されるようになった。事実、地元のスレッド・ウエスト紙は、「ゲットー化する地区」、「かなり乱れた地域」、「犯罪行為が激増」など、治安の悪化を積極的に報道している（Jacquemin, 2006）。

しかし、千人当たりの犯罪件数を見ると、オビエ団地はボルドー中心部の 4 割程度で、オビエ団地より犯罪率の高い地区も複数ある。ただ、地区の犯罪は、地区住民が起こすとは限らず、住民別の犯罪率ではオビエ団地はより高くなる。つまり、ジャクマンの論文に従えば、オビエ団地の住民は比較的犯罪を多く行なうが、オビエ団地の犯罪件数は平均的ということになる。

では、団地住民は地区をどう考えているのだろうか。多様な年齢層の 56 名に団地内で聞き取りすると、地区を危険と見ない人が 75%、地区を危険と見る人が 25%だったという。しかし、本当に危険と感じないのは、団地の中央に日中から夜間まで 10 数人の集団で居て、地区を支配している 18~25 歳の男性、弱者には当たらない壮年層の男性、危険意識がまだ芽生えていない子供であり、残り半数は、地区を支配する集団と近い間柄なので危険が無いと言う人、危険を回避するように行動しているため危険が無いと言う人であり、完全に安心しているとは言えない（Jacquemin, 2005; 2006）。

また、多くの住民は地区のイメージを悪化させた事件や暴動を頻繁に語るという。しかし、その語り口は多様で、事件や暴動を危険や不安の根拠とする人もいれば、どこも同じで、慣れているから怖くないとする人もいる。もっとも、事件や暴動を語る人は、被害者を知らなかったり、暴動時には住んでいなかったりして、過去の出来事を象徴的に捉え、地区のアイデンティティのようなものとして位置づける傾向がある（Jacquemin, 2006）。

さらにジャクマンは、団地住民に対して、日常的

に通る場所／避ける場所を聞くことで、空間構造との関係で危険認識を探った。住民の多くは、自室と数戸で共有するインターフォン前の空間以外、つまり人と出会うエレベーターや玄関ホールから、人影の少ない地下駐車場や抜け道までの空間は安心できないと考え、そうした空間を出来るだけ回避するよう日々移動している (Jacquemin, 2005)。

ところが、だからといって、オビエ団地が危険とは限らない。人間が危険を避けるのは普遍的なことだからだ。ジャクマン自身、オビエに 10 年以上住む人は、団地にも、その住民にも、その空間にも親近感と安心感を覚えるが、団地の外部には社会的不安や文化的疎外を感じると述べている (Jacquemin, 2006)。「危険」の概念は、聞き手と語り手でも異なるし、語り手が言及する主題の中でも変わる。

ジャクマンの試みは、犯罪統計、報道、表象、住民意識、住民行動の入り組んだ関係を考察するもので興味深い。しかし、「郊外団地の危険性」という主題に限られるので、それ以外の意識は分からない。

「危険性」以外の主題で郊外団地を扱う試みも必要だろう。また、ジャクマンの手法は、語りを集団レベルで論じるもので、語り手の民族的属性や社会的背景が明示されていない。個人に迫るアプローチも求められるのではないか。

いずれにしても、人々の語りは、聞き手への意識的なメッセージであり、社会を念頭に置いて表象を再構成する行為と言える。ここで、ジリ (Gilli, 2018) が集めた 93 県の住民の語りを紹介しておこう。例えば、「外部の人間は私達の町に良いイメージを持たない」、「ここは良いイメージがなく、非行や郊外のイメージがある」、「パリ人は暴力的な郊外というイメージを抱く」といった他者に関する語りにしても、「私達是否定的な烙印を押され *stigmatisé*、ずっと隔離されているように感じる」、「フランス人である気がせず、第三世界にいるような感覚だ」、「フランスで生活している実感がなく、ラ＝クルヌーヴ出身だから良い仕事を得られない」といった自己に関する語りにしても、郊外に負のイメージが与えられていることへの不平が表われている。

メディアや政治家の郊外像は戯画的に誇張されているが、郊外の場所の多くは危険ではないし、郊外に住む大半の人は犯罪と関係しない。そのため、暴動や犯罪の面ばかりが強調されることに郊外の人々は反発する。加えて郊外には、逆の面、つまり被害者になる面があまり指摘されないことへの不満もある。1980 年代初頭のリヨン郊外での暴動はマグレブ

系が中心だったが、同じ時期、多くのマグレブ系が人種差別主義者の犯罪の被害者になった (ベン・ジェルーン, 1994, pp.28-58)。また 21 世紀以降は、サブサハラアフリカ系 (サハラ以南アフリカ系、以後「サブサハラ系」と記す) に対する警察の過剰な反応や過激な対応が被害者を増やしている。

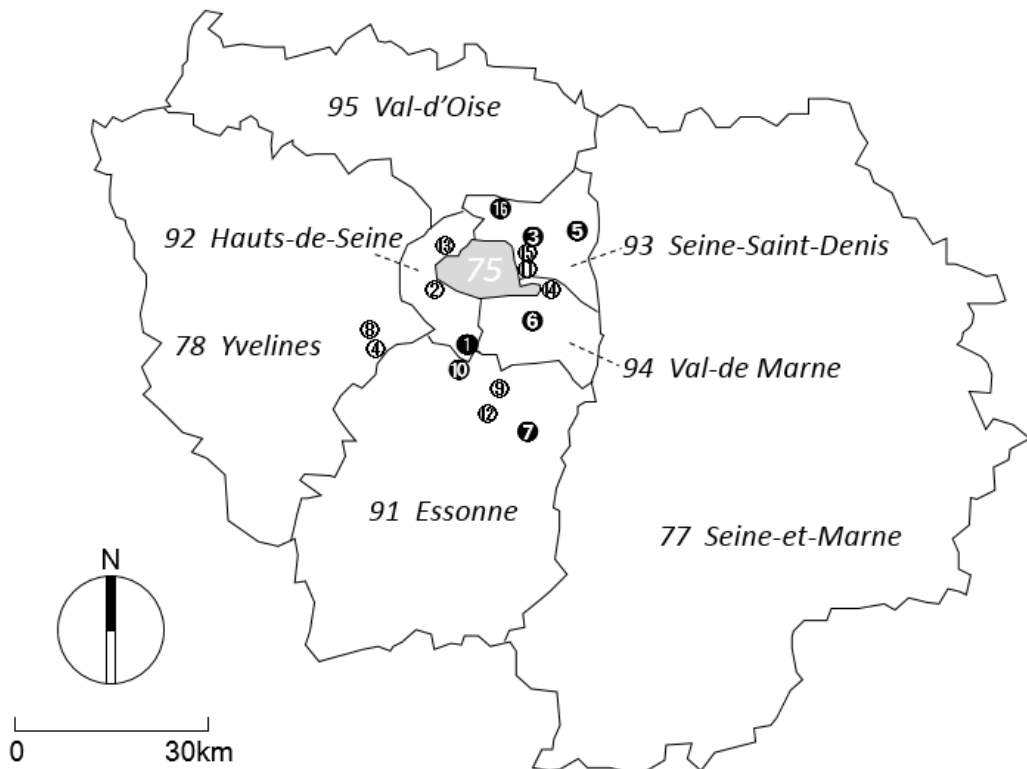
郊外の負のイメージには、もう 1 つ付随するものがある。10 代後半～20 代前半の若者だ。フランスの行政や報道は、「若者」や「郊外の若者」という言い方で、暗に非ヨーロッパ系の若者⁴⁾を否定的に捉える場合が多い。というのも、暴力・麻薬・窃盗と関係するのは、多くが若者だからだ。とりわけ大きな郊外暴動が起きた際、政治家や専門家は、郊外の若者を最初から異質の存在とみなし、それをどう社会に統合させるかという一方的な権力側の視点で語る傾向がある (中條, 2010)。

だが、郊外の若者の多くはふつうの人々であり、そうした側面に目を向ける必要もある。本稿では、郊外の若者の日常意識を探るため、個々のプロフィールが見えるインタビュー集『郊外の若者の自由な発言 *Paroles libres de... jeunes de banlieue*』を取り上げてみたい。

2. 郊外に関するインタビュー集

『郊外の若者の自由な発言』は、社会問題に通じた独立系のジャーナリストであるアンヌ・ドクワ Anne Dhoquois が編集し、時事週刊誌『エクスプレス *L'Express*⁵⁾』を出版するエクスプレス・ルラルタ Express Roularta 社から 2011 年に刊行された。内容は、郊外に住む 15～24 歳の若者 20 名のインタビュー記録で、まず 20 名のプロフィールが編集者によってまとめられ、続いて、「郊外に暮らす」、「家族」、「労働・勉学」、「宗教」、「政治・市民権」、「金」、「交友関係」、「メディア」、「社会活動や余暇活動」、「社会と自分自身」という 10 メインテーマに、1 メインテーマ当たり 2～8 のサブテーマが付く。このサブテーマが具体的な質問項目となるが、あるサブテーマで別のサブテーマの答えが話されることも多い。また、編集者によれば、若者によって答えのないサブテーマや、答えの内容が薄いサブテーマもあったということで、全 42 サブテーマに対して、20 名全員の発言が掲載されているわけではない⁶⁾。

本稿では、10 メインテーマのうち、「郊外に暮らす」に焦点を当て、その他、郊外問題と関わる「家族」、「労働・勉学」、「宗教」、「政治・市民権」にも考察を広げたが、それ以外のメインテーマは、個人



第1図 イル＝ド＝フランス地方

注) 灰色部分はパリ市域、二桁の数字は県番号を示す。丸数字は第2表、第4表、第5表に挙げた居住地（以前の居住地も含む）に付した番号で、黒丸数字はアラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者、白丸数字はヨーロッパ系の若者。

の人生や見解に関する事柄が多いので、若者のプロフィールを知るためだけに使った。また、フランス国内に地域差があるので、パリを取り巻く近郊（92県、93県、94県で構成される「小さな輪 la petite couronne」および遠郊（77県、78県、91県、95県で構成される「大きな輪 la grande couronne」）に暮らす13名⁷⁾を対象とした（第1図）。

若者達の発言はどのように分析できるだろうか。言説を一貫した基準で要約し、それを体系的な構造として抽出するのか、発話の水準や効果を評価するため、特定の主題について異なる言説同士を比較するのかで、方法は大きく分かれる。本稿では、1つめのアプローチを体系的分析、2つめのアプローチを比較的分析と呼んでおきたい。体系的分析には、ある程度の数の事例が必要だろうし、比較的分析には、同じ形式で、同じ分量の最低2つ以上の事例が前提となるだろう。

分析の意義を考える必要もある。日常で発せられる言説に、理解不能なものはほとんどない。理解不能ならば、言説として成り立たないからだ。したがって、そうした言説をさらに分析する目的はどこにあるだろうか。例えば批判的なアプローチは有効か

もしれない。言説に含まれるアマルガム⁸⁾、ステレオタイプ、ダブルスタンダードを見破るという意義がある。しかし、社会に蔓延しているアマルガム、ステレオタイプ、ダブルスタンダードが捉えられたとして、それを提示することは、それらの再確認・再生産に終わらないだろうか⁹⁾。また、言説の分析によって何かを明らかにするというアプローチもあり得る。ところが、テキストを単純に読んだり聞いたりしただけでは気づかないような点が把握できたとして、それは発見であって、読み過ぎでないと言えるだろうか。あるいは、分析結果が一般的な認識から外れていた場合に、それは意外な事実であって、的外れな解釈でないと言い切れるだろうか。

このように、言説の分析では、分析したが、その分析が有意義かどうかという自己矛盾のようなものが伴う。だからこそ、それを解決していく作業がつねに求められる。本稿では、『郊外の若者の自由な発言』（以後、「インタビュー集」とも呼ぶ）に掲載された若者の発言を分析することが郊外問題や郊外に対する先入観の問題にどのような意義を持つのかという点を頭に入れながら考察を進めていきたい。

Ⅱ 若者の発言に見られる社会的な構図

1. パリ郊外の 13 名の若者

『郊外の若者の自由な発言』の趣旨は何だろうか。表表紙には、フランスサッカー代表で最多出場試合数を誇り、社会的活動や政治的発言を積極的に行なう元サッカー選手のリリアン・テュラムの序文が載せられている。その一部を示そう。テュラムによれば、メディアは「郊外の若者」という言葉を繰り返し流布することで、虚構としての集合的想像力を歪んだ形で作り出す *conditionner* という。しかし、『郊外の若者の自由な発言』に掲載された若者達の発言が、この集合的想像力を崩す *déconstruire* だろう、ともテュラムは述べる。

郊外の若者。このような語の組み合わせ方は、メディアが繰り返し流してきた政治的構築物にすぎない。こうした表現が集合的想像力を作り出し、その想像力の中では、所作、肌の色、北アフリカやサブサハラから来た移民系のフランス人の若者といったことが真っ先に人々の頭に浮かんでしまう。また、この想像力の中では、フランスの若者が社会を良くするために貢献したいと考えているのに、悪く扱われてしまう。本書の大きな価値の 1 つは、こうした想像力を崩すことにある。(…)異なる社会階層間の先入観は簡単には消えないが、この本を読むことで、他者と出会う扉を開けることになる人もいるだろう。アイデンティティは個人の形でしか理解できないこと、そして居住地、性別、肌の色、宗教は、個人の長所や短所とは何の関係もないことを、若者達の言葉から認識してもらえればと期待している。(p.9-10)

裏表紙では、2 人の若者の発言の一部が示され、どのような内容のインタビューが集められているか垣間見ることができる。2 人のうち、1 人はエヴリイの郊外団地の若者、もう 1 人はブルジョワ郊外であるヌイイ=シュル=セーヌ (以後、ヌイイ¹⁰⁾と記す)の若者で、前者が民衆層の郊外、後者が富裕層の郊外を代表している。そして、前者の発言からは、非行に走るというメディアのイメージではなく、積極的に努力しようとする若者が郊外団地にいることが分かり、後者の発言からは、ヌイイの居住者が皆高慢なのではなく、フランス社会に根付くステレオタイプに悩んでいる人もいることが知れる。

僕は諦めないし、困難から抜け出そうとするし、働かし、社会が築いた壁の前でも立ち止まることはない、そんなタイプの郊外の若者だ。イシエム、20 歳、エヴリイ。

ステレオタイプは、ヌイイの人にも関係してくる。以前、私はヌイイに住んでいるとは言えず、ルヴァロワの近くに住んでいると言っていた。シャルロット、24 歳、ヌイイ。

つまり、『郊外の若者の自由な発言』の目的は、新聞・テレビからインターネット・ソーシャルネットワークまでのメディアが流布する「郊外=大型団地」、「郊外の若者=非行に走る若者」という先入観に疑問を呈し、郊外も、郊外の若者も多様であることを示すことであり、その手段として、アラブ=アフリカ=アンティル系とヨーロッパ系の若者へのインタビューが選ばれている。そして、インタビューでの発言は、タイトルにあるように、「自由な発言」とされる。もちろん質問は編集者が用意したもので、完全に自由な発言ではないが、それでも自由に答える余地は充分に残されている。

さて、13 名の若者は、どれくらいパリ郊外に住む若者を代表しているのだろうか。インタビュー集のメインテーマ「政治・市民権」の中のサブテーマ「投票しますか。2012 年は投票しますか」および「最も驚いた政治的出来事は」に対する回答を見れば明らかのように、13 名の中に人種差別者で国家主義者のルペン肯定する若者は 1 人もいない¹¹⁾。その背景には、北米や西欧の先進国の若者にリベラル志向が多いことと、パリ市域やパリ近郊ではルペンの支持者が少ないことがある。

2012 年大統領選の中心的な候補 5 名の 1 回目投票での得票率を見てみたい (第 1 表)。パリではルペンの得票率が極端に低い、近郊の 92 県、93 県、94 県、遠郊の 78 県でも明らかに低い¹²⁾。93 県ではメランションとオランドという左派系候補の得票率が高い。年齢は、「誰に投票するか、あるいはすでに投票したか」を調査会社が選挙当日にアンケートした

第 1 表 2012 年大統領選第 1 回投票の結果

	メランション	オランド	バイルウ	サルコジ	ルペン
全国	11.10	28.63	9.13	27.18	17.90
パリ	11.09	34.83	9.34	32.19	6.20
92 県	10.35	30.16	10.69	34.97	8.51
93 県	16.99	38.68	6.12	19.48	13.55
94 県	14.00	32.93	8.86	26.57	11.86
78 県	9.11	27.32	11.24	34.24	12.44
91 県	12.26	30.39	9.33	25.46	15.20
全年齢	11	28	9	27	18
18-24 歳	16	28	9	24	15

注) 地域別の値は内務省公式結果 (<https://www.interieur.gouv.fr/Elections/Les-resultats>)、年齢別の値は IFOP (2012) の当日アンケート調査の結果から筆者がまとめた。数字はすべて%表示。

ものであり、全年齢に比べて 18-24 歳の若者層ではメランションの人气が相当に高く、サルコジやルペンの評価は低い。したがって、13 人の若者の政治傾向は、実際のパリ郊外の若者の投票行動に近いと類推され、インタビュー集には相応の代表性があると言える。

13 名の若者を属性で分けると、性別は男 7 名、女 6 名、民族はアラブ=アフリカ=アンティル系 7 名、ヨーロッパ系 6 名となる。アンティル系は、フランス海外県のグアドルプやマルチニクの出身者であり、まぎれもないフランス人だが、歴史的な経緯によって黒人系が大半を占めている。また、アンティル系には、仕事を求めてフランス本土へ移ってくる人々が多く、本土内では郊外団地に暮らすことも少なくない。こうした背景から、本稿では、アラブ=アフリカ=アンティル系として一括した。一方、ヨーロッパ系には、いわゆる「元々のフランス人 *Français de souche*¹³⁾」と呼ばれるようなフランス系だけでなく、ドイツ系やニュージーランド系も含めた。

居住地域は、次のように分類した。すなわち、郊外団地の居住経験がある人、貧しい地区の居住経験がある人、郊外団地に囲まれた地域の居住経験がある人を、便宜的に民衆地域の居住者とした。そして、戸建て地区や富裕な地区で暮らしてきた人を、便宜的に富裕地域の居住者とした。

属性を、男:M、女:F、アラブ=アフリカ=アンティル系:A、ヨーロッパ系:E、民衆地域居住者:P、富裕地域居住者:C、のように記号化すると、MAP が 4 名、FAP が 3 名、MEC が 2 名、MEP が 1 名、FEC が 2 名、FEP が 1 名であり、男女ともアラブ=アフリカ=アンティル系で富裕地域居住者は 0 名だった。なお居住県は、78 県が 1 名、91 県が 3 名、92

県が 3 名、93 県が 4 名、94 県が 2 名で、77 県と 95 県はいなかった。

本稿の冒頭で述べたように、以前からフランスの郊外団地は、マイナスイメージの場所として、メディアで取り上げられてきたが、近年では 2005 年と 2007 年の大規模な郊外暴動がそのイメージをいっそう強めた。ところが、メディアの否定的な伝え方に対して、大型の「バー」や「タワー」が林立する郊外団地（第 2 図）、すなわち「シテ（団地）」や「カルチエ（地区）」と呼ばれる場所に住む人々は不満を抱いている。しかも、郊外団地の住民は、多くがマグレブ系、サブサハラ系、アンティル系、トルコ系、ポルトガル系など、フランス社会のマイノリティに当たる人々なので、メディアの伝え方はマジョリティによるマイノリティへの一方的なイメージ付与と受け取られている。

こうした中で、『郊外の若者の自由な発言』は、郊外団地の若者の声に耳を傾けるとともに、もう 1 つの郊外、つまり戸建て地域に住む若者にも話を聞いている。では、2 つの郊外の若者は、郊外という場所をどう位置づけているのだろうか。というよりも、そもそも 2 つの郊外の若者の考えは異なるのだろうか。異なるとすれば、どのように異なるのだろうか。まずは出来るだけ一貫した基準で若者の発言を体系的に分析してみたい。

2. 郊外に対する評価の差

メインテーマ「郊外に暮らす」のサブテーマは、「①郊外の若者とは何か」、「②あなたと異なる他の郊外の若者との共通点はあるか」、「③あなたは排除されていると感じるか」、「④服装・言葉・音楽・政治的意見に関して世代的なアイデンティティがある



第 2 図 郊外団地の景観

注) 写真は 93 県ラ＝クルヌーヴにあるレ・カトルミル団地で、左が「バー」型の建物、右が「タワー」型の建物。

第2表 13人の若者の郊外観

名前, 年齢 インタビュー時の居住市町村	性別	民族	地域	郊外の 若者評価	自身の 帰属先意識	郊外間の差異の有無
アブデル, 22 歳 93 県クリシイ=スウ=ボワ ^⑥	M	A	P	—	郊外の若者	○社会階層の違いを作る
シャルロット, 24 歳 92 県ヌイイ=シュル=セーヌ ^⑬	F	E	C	—	非郊外の若者 非パリ人	○文化的に違う／共通点を見出す 必要はあるが、壁が大きすぎる
ウジェニイ, 23 歳 91 県ジュヴァイシイ=シュル=オルジュ ^⑨	F	E	P	—	非郊外の若者 非パリ人	○学業での違いがあるので、関心が 異なる／服装や言葉が違う
イシエム, 20 歳 91 県エヴリイ ^⑦	M	A	P	±	郊外の若者	△経済的に違う, 文化的には同じだ が, ヌイイは違う
カンデ, 24 歳 91 県エヴリイ ^⑦	F	A	P	+	郊外の若者	△文化的に同じ／ブルジョワ地域の 若者より二倍努力が必要
ルイ, 20 歳 94 県ノジョン=シュル=マルヌ ^⑭	M	E	C	—	非郊外の若者 パリ人	○文化的に違う
リュカ, 22 歳 92 県ブローニュ=ビヤンクール ^②	M	E	C	—	非郊外の若者 パリ人	○社会環境で選択肢の数が違う
メリサ, 17 歳 93 県ボンディ ^⑤	F	A	P	+	郊外の若者	○生活が違う
ンファンテ, 20 歳 94 県クレティユ ^⑥	F	A	P	+	郊外の若者	○社会環境で選択肢の数が違う
ラファエル, 22 歳 93 県ロマンヴィル ^⑮	M	E	P	—	非郊外の若者 非パリ人	○文化的に違う
サイード, 24 歳 93 県スタン ^⑩	M	A	P	±	郊外の若者	△社会や人生については同じように 考える
ヴァンサン, 22 歳 92 県アントニ ^①	M	A	P	+	郊外の若者 南仏ではパリ人	△田舎の郊外は行動が近いが, ヌイ イは価値観が違う
ヴィオレット, 18 歳 78 県シャトーフォール ^④	F	E	C	—	非郊外の若者 パリ人	○文化的に違う／シテの若者と交流 ない／文化は社会集団で細分化

注)「地域」は居住地域のこと。「郊外の若者評価」は、肯定的評価を「+」、否定的評価を「-」、両義的評価を「±」で示した。「郊外間の差異の有無」では、差異がある場合を「○」、文化面では差異がない場合を「△」で示した。町に付した丸数字は第1図参照。

か」「⑤シテは流行を先導しているか」、「⑥あなたの
恰好はグループへの特定の帰属を示すものか」だが、
これらを別個に扱うことはしない。インタビューで
は、回答者が前の質問に戻って答えることもあれば、
結果的に後の質問を先取りして答えることもあるし、
複数の質問を合わせて答えることもあるので、質問
と回答が一对一に対応しない。したがって、複数の
質問と回答を総合して検討する必要がある。

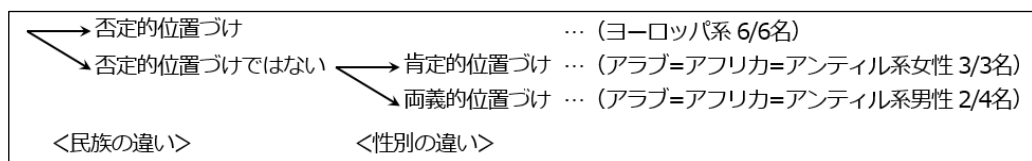
「はい／いいえ」や選択肢で選べるような質問へ
の回答の分析から始めよう。まず、「①郊外の若者と
は何か」では、いろいろな形容詞や修飾語が用いら
れるものの、回答は、肯定的、否定的、両義的の3
通りに分けられる。また、「②あなたと異なる他の郊
外の若者との共通はあるか」では、「差異がある」、
「同じ部分もある」の2通りの答えが挙げられる。
さらに、「①」や「②」の質問に対する回答からは、
若者達が自身を「郊外の若者」、「非郊外の若者」、「パ
リ人」、「非パリ人」のどれに位置づけているかが把
握できる。

そこで、13名の属性と、「郊外の若者評価」、「自
身の帰属先意識」、「郊外間の差異の有無」に関する

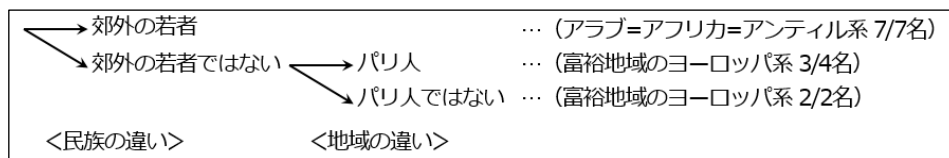
回答を整理してみた(第2表)。なお、ここで言う
「郊外の若者」とは、脆弱な郊外団地に住むアラブ
=アフリカ=アンティル系の若者を指す。もちろん、
これは社会の中で作られたイメージだが、現在のフ
ランスでは、「郊外」と「若者」と「アラブ=アフリ
カ=アンティル系」の3つが深く結び付き、13名の
若者もそのことを前提として発言している。

「郊外の若者評価」では、ヨーロッパ系は6名全
員が否定的評価で、アラブ=アフリカ=アンティル系
は否定的評価が7名中1名に留まる。残り6名では、
女性が3名とも肯定的評価、男性は3名中2名が両
義的評価をしている。したがって、第3図のような
評価体系が描ける。すなわち、「郊外の若者評価」に
は、民族の違いが最も影響し、それによって否定的
評価か否かが決まる。次に、否定的評価を下さない
若者は、性別(ただしアラブ=アフリカ=アンティル
系に限る)によって、肯定的評価をするか、両義的
評価をするかに分かれる。

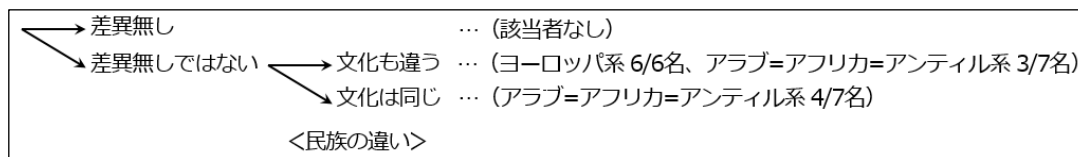
「自身の帰属先意識」では、アラブ=アフリカ=ア
ンティル系は全員が自身を郊外人と感じ、ヨーロッ
パ系は全員が自身を非郊外人と感じている。ヨーロ



第3図 郊外の若者評価



第4図 自身の帰属先意識



第5図 郊外間の差異の有無

ッパ系のうち、性別で見ると、女性では1名がパリ人、2名が非パリ人、男性では2名がパリ人、1名が非パリ人、居住地域で見ると、富裕地域居住者では3名がパリ人、1名が非パリ人、民衆地域居住者では2名とも非パリ人、と感じている。つまり、パリ人と感じるか否かは、性別よりも居住地域に左右される面が大きい。したがって、場所への帰属意識は、第4図のように、まず民族の違いで決まり、次に地域の違い（ただしヨーロッパ系に限る）で分かれると言える。

「郊外間の差異の有無」では、差異が無いとする立場の若者は皆無だが、差異が有るとする立場の若者には、より微細な部分で相違がある。すなわち全面的に差異が有るとする立場と、文化面では差異は無いとする立場だ。前者は、ヨーロッパ系6名中6名、アラブ=アフリカ=アンティル系7名中3名に見られ、第2表で○印を付けた若者が該当する。こうした若者による「文化的に違う」や「生活が違う」という発言は、収入規模や雇用機会の格差があるという前提の上で、さらに行動や考え方も違うという意見と考えていい。それに対して、後者は少なくとも文化は同じとする若者で、アラブ=アフリカ=アンティル系に3名いる。したがって、第5図に示すように、民族の違い（厳密に言えば、ヨーロッパ系で

あること）が評価体系に大きく影響する。

以上のように、若者の発言内容を対象として、できるだけ基準を一貫させた体系的分析を試みた。抽出された評価体系は、例外があるし、必ずしも厳密な整合性を追求したものではなく、大まかな傾向を把握したものにすぎない。しかし、以下の3点を指摘することは可能だろう。

第1に、郊外に対する評価は、「郊外の若者評価」、「自身の帰属先意識」、「郊外間の差異の有無」のすべてにおいて、民族の違いで大きく決まる。つまり、郊外の若者の考え方は、アラブ=アフリカ=アンティル系とヨーロッパ系とで異なり、両者の間に境界が見られることを認める結果になった。もちろん、これは郊外団地とブルジョワ郊外という2つの郊外世界の存在を反映したものだが、先入観が再生産されてしまった面も残る。

第2に、下位レベルの微細な評価に関しては、「郊外の若者評価」では、アラブ=アフリカ=アンティル系は性別によって、否定的か両義的かに分かれ、「自身の帰属先意識」では、ヨーロッパ系は居住地域によって、パリへの帰属意識があるか否かに分かれる。したがって、微細な面に関するかぎり、アラブ=アフリカ=アンティル系では男女差が、ヨーロッパ系では地域差が、意識の違いを左右すると言える。この

点は、先入観を再生産するものではないが、ある程度予想できたことで、意外ではない。

第3に、アラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者は、「郊外の若者評価」と「郊外間の差異の有無」において、郊外をどう捉えるかで見解が揺れ動き、ヨーロッパ系の若者は、「自身の帰属先意識」において、自身をパリ人と見なせるかどうかで見解が一致しない。したがって、アラブ＝アフリカ＝アンティル系の関心は郊外の方により強くあり、ヨーロッパ系の関心はパリの方により強くある。とくにヨーロッパ系のパリへの関心の高さは、郊外への関心の薄さの裏返しと考えられる。一般的に言って、フランス社会は、マイノリティであるアラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者の意識に対して厳しいが、実際はマジョリティであるヨーロッパ系の若者の意識にも問題が存在する可能性がある。

Ⅲ 異なる2つの郊外観

1. 個々の発言の比較の試み

発言内容が民族で大きく異なるという体系的アプローチの結果は、アラブ＝アフリカ＝アンティル系7名、ヨーロッパ系6名という発言者数からいっても、裏表紙に双方の発言が1つずつ紹介されていることからいっても、妥当だろう。けれども、体系的アプローチだけでは、社会の先入観を覆すというインタビュー集の目的は達成されない。そこで次には、発言内容をできるだけ詳細に紹介した後¹⁴⁾、テーマを絞って個別の発言を比較することで、先入観を崩すような契機を探してみたい。

13名の発言内容は第3表に整理した。内容の把握を優先したので、逐語訳はしていない。⑩は編集者がまとめた若者のプロフィールに、筆者が他のサブテーマにある情報を加えたもので、①～⑥はメインテーマ「郊外に暮らす」の6サブテーマに対する若者の発言に当たる。ただし、サブテーマと内容が完全に一致するわけではないし、1つのサブテーマに複数のサブテーマの内容が含まれることもあるし、あるサブテーマについて別のサブテーマの内容が書かれることもある。そこで、他のサブテーマ、他のメインテーマでの発言であっても、内容が関連する場合には、①～⑥に書き加えた。

まず試みに、宗教をテーマとして、どれくらい先入観が退けられるかを確かめてみたい。フランスには公共や教育の場に宗教を持ち込んではいけないというライシテの原則があるので、宗教が社会や地域

を左右することはない。それでも一部の人々は、郊外団地＝イスラム教、ブルジョワ郊外＝カトリック、のような先入観を持っている。

アラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者の発言から見てみよう。アブデルはムスリムの信仰者だが、実践者ではない¹⁵⁾。それに対して、イシエムはムスリムの熱心な実践者であり、祈りをし、ラマダンをし、モスクへ通い、宗教は重要と話す。カンデは祈りもラマダンもするムスリムの実践者だが、スカーフは絶対に被らないと言い切る。ヴァンサンは元々カトリックだったが、友人の影響でイスラム教へ改宗したものの、恋人はキリスト教徒であり、逆にメリサはカトリックだが、恋人はイスラム教徒で、本人自身もイスラム教への改宗を考えている。また、サイドはムスリムの実践者ではない父と違って、熱烈なムスリムの実践者だが、父と同様に左派政党を支持している。このように、異教徒ペアの存在にしても、宗教と左派政党との連動にしても、多くの人がイメージする宗教像とはかけ離れていて、多様性に富んでいる。

ヨーロッパ系の若者の発言も見てみよう。シャルロットは具体的な宗教を明示することなく、信仰はあるが、神より魂を信じ、ウジェニィも宗教に対する関心は薄く、カトリック家庭に育ったが、12歳でミサに行かなくなり、神より愛を信じていて、無神論者に近い。それに対して、ルイはカトリックの実践者ではないが信仰者であり、ラファエルはカトリックの信仰者で、フェミニストである母の影響も受けたが、2007年大統領選では女性候補のセロゲンヌ・ロワイヤルに投票しなかった。ヴィオレットはカトリックの信仰者でも実践者でもなく、宗教的な教育も全く受けていないが、それでも宗教は文化の一部と考えている。また、ウジェニィやルイは、カトリック教徒で、選挙では左派の政党に投票する。ラテンアメリカの「解放の神学」を持ち出すまでもなく、カトリックと政治的左派は相反するものではない。したがって、ここでも、宗教は政治的右派に近いというような先入観は崩される。

宗教は人生に重要なものだが、それはとりわけ心の内側においてだろう。信仰者と実践者の区別があっても、宗教の中で何を行なうかは個人の判断であることがインタビュー集から分かる。キリスト教とイスラム教に関しても、決して高い壁があるわけではなく、改宗もあり得るし、異なる教徒同士が恋人になることも不自然ではない。

第3表 13人の若者の発言の概要

アラブ=アフリカ=アンティル系の若者

¶ アブデル 22 歳 (93 県クリシ=スゥ=ボワ, MAP)

- ① モロッコ系。10 歳でフランスに来て、クリシ=スゥ=ボワのシェヌ・ボワンテュ団地^{A)}に住み、職業バカロレア^{B)}を取り、仏国籍取得を待っている。出身の町の若者のための活動団体で働きたい。兄弟が 2 人、姉妹が 2 人いる。兄弟 1 人と姉妹 1 人はドイツで働き、姉妹 1 人は結婚。兄は僕と両親と一緒に暮らしていて、家の雰囲気は良い。イスラム教の信仰者だが、実践者ではない^{C)}。2012 年はサルコジに投票しないで、左派に投票する。最も驚いた政治的出来事はクリシ=スゥ=ボワの暴動だが、社会を良くした面もある。暴動のおかげで町に路面電車が通じた。僕自身は暴力的でなく、参加していない。
- ① “郊外の若者”と言えば“危険”が浮かぶ。ただし、これはメディアのイメージで、すべてを一括りにしている。僕にとって“郊外の若者”とは、まず仕事を見つけにくいような“厳しい状況の若者”を指す。それと、僕達は劣悪で活気のない町に住んでいる。
- ② 出身の社会階層の違いが差異を作る。僕達の町には何もない。映画館も公共交通もないので、道を外す人も出てくる。
- ③ 自分のスタイルがある。ある時はパーカーにジーンズだし、ある時はブランドのシャツ。イメージはない。

¶ イシエム 20 歳 (91 県エヴリ, MAP)

- ① 8 歳でアルジェリアから来て、両国の国籍を有する。2 つのアイデンティティを持つブール^{D)}だと思う。エヴリの脆弱な地域の 1 つ、ボワ・ソヴァージュ団地で育った。職業バカロレアを取得し、自動ドアの技術・修理の仕事をしている。しかし、しゃべりの才能を活かし、俳優になって、親を助きたい。父は警備関係で働く。5 人兄弟で、絆は濃い。イスラム教の信仰者・実践者で、毎日のお祈りを欠かさないし、ラマダンもするし、金曜にはモスクに行く。イスラム教は非常に重要。最も驚いた政治的出来事は、2002 年大統領選でルペンが決選に残ったことで、移民系の人々は不安だった。ルペンは狂人で危険だし、その娘も同じ。イスラム教徒がフランスを占領するかのようになり、人々に思い込ませようとしている。
- ① “郊外の若者”には多くの意味がある。つまり、どのような郊外かによる。いろいろな郊外がある。富裕な、貧しい、中程度の、普通の、危険な、など。自分が属している郊外を言えば、勇気。僕は貧しくも、豊かでもない郊外の出身だが、第三世界ではない。僕のように郊外に育ち、アラブ系で、家族が多ければ、そうでない 20 歳の若者より、はるかに問題は多い。パリ人なら普段は学校に行き、週末は楽しむが、僕は家族を助け、働かなくては行けない。僕は働いて、抜け出し、挫折せずに、他人が作る障壁で立ち止まらないような郊外の若者だ。もし立ち止まれば、不平等の中に舞い戻るか、そこから抜け出せなくなる。
- ② 戸建て地区や裕福な町に住み、親の経済状況が良くても小遣いが多ければ、僕が抱えるような問題はない。人生が違う。ヌイイの 20 歳なら、自分の給料を父や母に渡すことはない。僕にはフランス人、アラブ人、黒人の友人がいる。金持ちも、貧乏人もいるし、僕と同じような地区の人も、エヴリ近くのブルジョワな町の人もいる。しかし、共通点はある。同じ音楽を好み、同じユーモアを解する。ヌイイの人間は自分の殻に閉じこもる。僕と同じ世界ではない。少年期にパリへ出かけた時は、郊外から来たことで変に思われなかったコンプレックスを感じていた。しかし、今は何も気にならない。僕が勝手に思い込んでいただけだから。
- ③ 郊外はシテだけでない。77 県の奥、ヌムールは田舎で、道を横切る牛やトラクターに出くわす。信じられないが、フランスには戯画的なイメージがある。アラブ人=イスラム教徒は間違いだ。イスラム教徒が最も多い国はインドネシアだということを忘れていて、アラブ人=テロリストもそうだ。ヒゲだけで疑われる。スカーフだけで疑われる。“イシエム、郊外、20 歳、シテ出身”というだけで、人々は“彼は仕事が終わってから、車を燃やして遊んでいる”なんて言い合う。
- ④ 若者の大半は人種差別に反対で、80 年代と違う。ブールだったら、生活は厳しく、スキンヘッドにセーヌ川へ投げられた^{E)}。しかし変わった。学校の先生が出欠確認のために呼ぶ名前は、ビエール、アミナ、モアッド、ベルナルなど。皆一緒に育った。昔からのフランス人にも違いはなく、僕達と同じだし、皆フランス人だ。お互いを知るようになったので、人種差別は減った。こうやって時代遅れな人種差別は消えていく。
- ⑤ 貧しい郊外は、言葉や服装や音楽での創造の源だが、他の若者が真似ているかは分からない。それでも、ラップがヌイイで好まれていることは知っている。ラップは、僕の住むような郊外から発信されるが、彼らも聴く。多分、良い気持ちになれるから。ラッパーは人生や育った郊外を語る。ラップを介して、ヌイイの若者も住んだことのない郊外を経験できる。
- ⑥ いろいろなスタイルをするが、今日の僕は、穴開きジーンズ、ニューヨーク・ヤンキースの帽子、フード付きパーカー、ナイキのエアマックスのシューズ。エアマックスが 1 つもない若者なんて、郊外では多分ヌイイだけだろう。エヴリの若者は、ナイキのエアマックスを最低 1 足は持っているし、その父親だってそうだ。とくに僕の住むような郊外には、同じ恰好をする若者がいるが、それは同じコミュニティに属していることを示すため。

¶ カンデ 24 歳 (91 県エヴリ, FAP)

- ① 父はマリ人で、1976 年にフランスに来た。私はフランス生まれで、両方の国籍を持っている。私は仏語の他、ソニンケ語、バンバラ語を話し、2 つの文化を有するが、それは利点。エヴリの中層建築が並ぶ団地に育った。職業バカロレアの取得後に技術バカロレア^{F)}を取得し、社会指導員になるため私立学校で学んでいる。“Permis de Vivre la Ville^{G)}”という社会団体に参加し、郊外の若者の手助けをするともに、2007 年出版の“シテのレクシク Lexik des cités^{H)}”の編集にも加わった。父はパリの高級料理店のシェフ、母は病院の清掃員として働く。両親と暮らし、よく話し、関係も良い。兄弟は 3 人、姉妹は 2 人いる。アフリカの家庭はいつも誰か居て賑やか。イスラム教の信仰者で実践者。ラマダンも毎朝のお祈りもするが、スカーフは絶対に被らない^{I)}。宗教は心の支えで、個人的なもの。過激派はイスラム教徒ではない。イスラム教とは寛容のこと。社会を変えるため投票する。最も驚いた政治的出来事は 2002 年大統領選で、両親はパニックになった。オバマ大統領の誕生には心を打たれ、自分でも“できる”と口にしてたし、それは素晴らしいシンボルだから、いずれフランスにもそうした時が来るかもしれない。
- ① ヌイイの若者は郊外の若者でない。パリのすぐ近くで、裕福な境界だから。郊外というよりパリ。郊外は文化的混合の場所で、それが長所。エヴリには、黒人、アラブ人、インド人などがいる。境界では皆知り合い。郊外とは生き方の 1 つ。コミュニケーションが容易。裕福な境界では、皆が知り合いということはないと思う。単なる私のイメージかもしれないが、そう感じている。
- ② / ④ 服装や音楽など文化的な点では、私と違う郊外の若者とも共通点を感じる。イメージや既成観念に基づいてはいけいない。例えば、ヌイイには裕福な人しかいないと私が言うも、多分それは間違っている。私はヌイイに行ったことがないし、自分の目で見たこともない。多分、ヌイイの人にも、私達と同じように、人の付き合いがあると思う。言葉も共通点。若者の話し方は、私達もヌイイも変わらない。それぞれの地域には特有の俗語があるが、基本は同じ。例えば、私達の境界では警察のことを“ポワント・シス^{J)}”と言う。言葉がすぐに変化することは、“シテのレクシク”を作った時に知った。私達は新しい語を発明したと思っているが、古い仏語に元があり、植民地や移民を介してやってくることも多い。シテでも、言葉は、アラビア語、バンバラ語、インド語から借用しているので、いろいろな物を混ぜて使っている。
- ③ 私のようにシテ出身だと、富裕地域出身者の 2 倍努力しなければいけない。居住地による差別は受けてきた。
- ⑤ 富裕地区では文化的混合がなくとも、私達の言葉は使っている。流行だから。金持ち達も、“ウェシュウェシュ^{K)}”を少し違う風にだけ、真似て使う。TV 広告でも、時々逆さ言葉がある。私達の話し方から借りたもの。
- ⑥ シテにはだぶだぶのズボンを履く若者がいるが、皆そうとは言えないし、私はしない。私はフェミニンな恰好をする。私のスタイルは私自身のもの。私はグループへの帰属意識のために服を着ることはしない。私はシテ育ちだが、ラップはあまり聴かない。

¶ **メリサ 17 歳 (93 県ボンディ, FAP)**

- ①父はグアドルブ出身のフランス人、母もフランス人。母と妹と一緒に長い間、ボンディ・ノール地区の HLM^Lのバー^Mに住んでいた。再開発で建物が壊されたため^N、ボンディ中心部の新しい建物に移った。中学校を出て、学業は終わった。保育の仕事をしたい。母は会計、父はゴミ収集で働く。両親との関係はあまり深くない。父は母と離婚したが、私は時々会う。姉妹が1人いて、喧嘩するが、それは日常の些細なこと。恋人は信頼している。恋人はイスラム教の信仰者だが、実践者ではない。私は洗礼も受けていないし、10歳からカトリック教会に行っていないので、したいと思えばイスラム教に改宗するかもしれない。
- ②郊外の若者とは、私達、つまりパリ周囲のシテに住んでいる若者のこと。私達の間にはとても社交的で、知らない人同士でも話ができる。シテではすぐに知り合いになれる。前は、ボンディ・ノール地区のシテに住んでいた。周囲に知り合いが居て良かった。住んでいたシテのタワー^Oが取り壊されたので、今は中心部の静かな所に住んでいる。けれど、汚くても、前に住んでいた所の方が良い。家の外に出ると、必ず知り合いに出会った。工事前のボンディ・ノール地区が懐かしい。
- ③些細なことで暴力的になる人々がいるシテもある。パリの若者とシテの若者の暮らしは違うが、結局人は皆違う。人間に範疇なんて無い。ボンディ・ノール地区にはちゃんと働く人もいる。何も知らないで、私達のことを馬鹿にする人、盗人と言って非難する。私はシテに暮らして何も問題ない。私は誰も脅さないし、落ち着いている。
- ④シテではたくさんの言葉を発明し、“キフェ^P”など、他の場所で使われる。私達は批判されるが、流行を創り出す。それは私の誇り。私達がシテに住んでいても、浮浪者でないことは、皆知っている。他の人も、私達と同じような服装を着て、同じように話すのに、私達のことを批判するので、私には分からない。
- ⑤私のスタイルがある。いろいろな恰好をする。オシャレに全然気を使わない時もあるし、服装に凝る時もある。シテでは、皆自分のスタイルがある。もっとも、男はだいたい同じ格好をする。ただし、それが気に入っているなら、いいと思う。

¶ **ンファンテ 20 歳 (94 県クレティユ, FAP)**

- ①両親はガンビア人。父は 1985 年、母は 1989 年にフランスにきたので、仏国籍を有していない。私はフランス人で、その意識が強い。一般バカロレア^Qを取得後、学際コースで勉強したが、映画や執筆の仕事に関心を持っていて、将来は映像ジャーナリストになりたい。2010 年から 3 年間ジャーナリズムを勉強するために、自分の育ったクレティユの脆弱なル・バレ地区を離れた。父はゴミ収集、母は清掃で働く。父や母とは話し合い、助け合う。最も驚いた政治的出来事は、郊外の若者に対して、大統領であるサルコジが“失せろ、バカ^R”と言ったこと。兄弟姉妹は 4 人いて、総じて仲は良い。2010 年の地域圏選挙で初めて投票した。両親が選挙権を持っていないだけに、選挙はとても大切で、選挙前には家族で議論する。2012 年は、細かい政策よりも大きな視野で選び、左派に投票する予定。
- ②“郊外の若者”から浮かぶのは、シテ、文化的混合、そして分離された空間。
- ③シテの人には共通点がある。皆が知り合い。社会団体の手助けがあるので、活動やプロジェクトも生まれる。しかし、富裕な郊外に住む若者、すなわち私とは違う社会的身分を持った若者との共通点はない。大きな違いとしては、ヌイイに暮らす人は、そこが綺麗だから選んだということ。サンモールやヴァンセンヌ^Sに暮らす人も、そこがパリより静かで安いから選んだ。HLM のタワーに暮らす人は、選んで住んでいるわけではない。だから当然、共通点よりも差異が多くなる。
- ④メディアが郊外に言及するのは、暴動や麻薬について言うため。皆がそうではないが、私は郊外から抜け出そうとした。パリへ行くことは、私の周りの多くの人にとって難しい。パリには境界があり、別の国のようなから。シテの人は、クレティユは自分の家で、居場所があり、受け入れられているとを感じるが、パリは居心地が悪く、受け入れられるか分からない、と感じている。シテの人の考え方や生き方は、パリの人とは違う。しかし、私には、壁がないと考える若者と同じように、壁はない。私は、パリでも、自分の家のように感じる。壁は頭の中にあるものだし、人の性格にも拠る。
- ⑤若者は郊外人の誇りを持っている。自分達のアイデンティティを否定しない。ときにアイデンティティを出し過ぎるほどで、戯画的になる。とくに同じような服装をする男はそう。女の方は、居住地と関係なく、同じような服装をする。私は、パリの文化を受容しているが、郊外出身者と言うことに抵抗はない。私自身は、パリに住むことになっても、郊外出身のアイデンティティは一生持ち続けると思う。
- ⑥音楽の点では、ラップや R&B などが郊外発だが、言葉の点では、シテが流行を創っているとは言えない。

¶ **サイド 24 歳 (93 県スタン, MAP)**

- ①父はアルジェリア系で仏国籍がないが、母には仏国籍がある。僕は仏国籍を有し、フランス人の意識が強い。職業バカロレアを取らず、高校を止めてから、警備の仕事をしたが、解雇されて 2 年間失業した。その間に社会団体のボランティアになり、自分の育ったル・クロ・サン・ラザール地区の若者を助ける仕事をした。しかし、地区の子供に将来がないので、自分の未来の子供のために、外に出たい。以前僕が何もしなかった時には母と揉めたが、今は両親と良い関係。母は僕に良くしようと思っていただけだ。母は料理店で調理を担当していたが、父が病気になるまで、その看護のために仕事を辞めた。それをきっかけに、僕もハンディキャップがある人のためのバカンスを組織する団体に登録して、ボランティアになった。兄弟が 3 人、姉妹が 3 人いる。私はイスラム教の信仰者と実践者で、毎日 5 回お祈りし、モスクに行き、ラマダンをするが、父は実践者ではなく、私に何も強要しなかった。私がイスラム教を実践するのは、自分の考えから。父が共産党員で、僕も仕事に参加していたが、父の影響ではなく、自分の考えで共産党に投票した。2012 年も左派に入る。
- ②ここ、ル・クロ地区の子供や若者皆が浮かぶ。困難も浮かぶ。メディアが郊外の若者に言及する時は肯定的でない。メディアが伝える郊外の若者は、麻薬を売買し、恐喝し、建物の玄関でたむろする。そうした若者も確かに多いが、全員ではない。メディアはすべてを一括りにする。仕事を探そうとしている若者も多い。
- ③共通点を持っている。同じように人生や社会について考える。どのような郊外の若者でも、僕は理解できる。
- ④以前は、居住地ごとに服装のスタイルがあり、93 県は他の郊外と違っていた。皆ジャージで、制服のようなものだった。今は変わって、皆一般的な恰好をしているし、野球帽を前後逆さまに被る若者もいない。そして、ジーンズにバスケットシューズなど、クラシックなスタイルになっている。ヌイイに友人が 1 人いるが、僕と同じ格好だ。聴く音楽も同じ。アメリカのラップ、フランスのラップ、それに R&B。けれども、話し方は違う。それぞれが語彙を発明し、同じ語彙でも町によって意味は異なる。
- ⑤シテは真似られる。以前はそれが自慢だったが、今はどうとも思わない。誰が何を発明しようが、重要ではない。以前はル・クロ団地の若者のグループにアイデンティティがあったが、今はそれほどない。社会団体に入って、僕は変わった。

¶ **ヴァンサン 22 歳 (92 県アントニ, MAP)**

- ①父はアルジェリア人で、母はスペイン人。僕はフランス生まれのフランス人で、自由・平等・博愛の価値観を共有するし、国籍は 1 つだけ。スペインに行っても、フランスに戻りたいと思う。最初は 92 県マッシイの脆弱なシテで暮らし、それから 92 県アントニのシテであるイ・バコネ団地に母と生活した。16 歳で勉強は終わった。今は社会団体で働き、脆弱な地区で文化活動を発展させようとしている。また、“ラムナス^T”という名でラッパー活動をしている。父は営業開発、母は教師。僕が 14 歳の時に両親は離婚し、父は出て行ったが、今も会う。母とは強い関係があり、父がいなくなると、母 1 人になった時、弟達の世話係は僕がした。僕はイスラム教に改宗したが、親類にはそれが理解できない人もいる。僕はイスラム教の信仰者かつ実践者で、人生にとっても重要。父はイスラム教の実践者ではなく、母方の母が熱心なカトリック信者だったので、小さい頃はカトリックの環境で育てられた。イスラム教の友人の話を聞いて、自分の考え方がカトリックでないことを知り、16 歳でイスラム教に改宗した。今の恋人はキリスト教徒。

2007 年大統領選と 2010 年地域圏選挙に行った。選挙は民主主義において国民が力を行使できる機会。選挙に行かないのは理解できない。サルコジに反対なので、2012 年の選挙では、マイノリティのために働く小さな政党に入りたい。フランス・キュルチュールやフラン・サンフォ^Uを聴いて知識を養っている。最も驚いた政治的出来事は 2002 年大統領選でルペンが決選に残ったこと。極右の台頭という恐怖を公的に人々は知った。

- ①集合的思考では、郊外の若者とは、大きめの服を頭から被り、だぶだぶのズボンを履き、少し怖そうな、ゴロツキ風の顔をした奴だ。このイメージは軽蔑的なものだが、僕達、郊外の若者はそれを引っ張り返して、自分達の界限に混合性を創り出すことができる。郊外の若者というのは、この混合性のこと。だから、パリと郊外の間に大きな断絶はない。僕は、フランスのスケールではパリ人と考えている。南仏に行った時は、パリから来たと言う。
- ②共通点はある。田舎と呼べるような郊外があって、同じような場所に出掛け、同じような音楽を聴き、RER^Vに乗る。彼らの方がより村的で、皆知り合いで、他人のことをすべて知っている。少しシテに似ているが、僕達の方が外に出掛ける。僕達は仲間でパリに出掛け、豪華な場所を見て、店を訪れる。ヌイイは別世界。勉強の仕方も違う。ヌイイの若者は、僕のように学校を辞めさせられることはなく、私立学校に通い続ける。求める価値観も違う。僕達がしていること、すなわち文化的プロジェクトを立ち上げる、自分達の価値観を追及すること、貧しさを糧とすること、つまり資金無しで何かを成し遂げる夢を糧とすること、自分の力以上のものを出して目的に達すること、は彼らにない。彼らは簡単だ。プロジェクトが立ち上がれば、すぐ実行できる。僕達は、昔から知っている人達の手助けを借り、チームやプロジェクトに委ねる。シテには強い絆がある。皆“ダチ”と言ひ合う。僕には“ママ”と呼ぶ女性も何人かいる。心を開き、扉を開け、多くのことを与えてくれるからだ。こうしたことは他の場所ではない。
- ③僕は、粗野や外見に関してシテの若者と同じコードを好む。戸建てに住む友人とは別の世界に属していた。アントニに移ってからは、服装で、誰とも話す気になれず、ブルジョワの環境に困惑した。僕は反発したが、周囲が和らげてくれたし、敵意をむき出したが、やがてアントニのシテ出身の友達が多くなった。シテの人間、裕福な地域の人間、隣の町の人間など、アントニにはいろいろな人がいて、その混合性が面白かった。僕はシテの人間のアイデンティティを保持していて、僕のコードはシテにある。このコードは服装だけに限らない。ヌイイの人間と同じ革ジャンを着ていても、すぐに僕がどの出身か分かるはずだ。
- ④あるラッパーは言った。“シテの中から出てくるものを見ると、貧困にはカリスマ性が備わっているのが分かる”と。貧しさがいい人もいるが、僕達は逆に、社会的成功が可能な時はそうする。16 区^Wの若者も激しいラップのファンだ。裕福な郊外にも、貧困のカリスマ性を求める人がいる。きっと流行を取っているのだと思う。僕達の間にも、他からのものがある。スリムなジーンズはパリ発の流行だが、シテで履く人もいる。
- ⑤僕は派手な恰好をしない。自分が好きな服、仲間や家族が気に入ってくれる服を着る。嗜好は無意識のものだ。誰でもグループに属していて、そのグループには独自のコードがある。何を着て行こうか意識的に考えるのは、コンサートをする時だけ。ラップのファンの前では、コードを守るように気をつける。コンサートの時は、ラップのグループ名の入った T シャツにワークパンツ。ジーンズでコンサートする時は、ラップとは別のコードを示す時だ。

ヨーロッパ系の若者

¶ シャルロット 24 歳 (92 県ヌイイ=シュル=セーヌ, FEC)

- ①父親はニュージーランド人で、仏国籍はない。ずっとヌイイ=シュル=セーヌで暮らしてきたが、パリへ引っ越し予定。すべて私立学校で学んできた。父は料理店経営者、母は主婦で、両親とは良い関係。兄が 2 人いるが、1 人は今の両親が再婚後の子供、1 人は再婚前の子供。2012 年は投票するが、投票先を決めていない。最も驚いた政治的出来事はチュニジア、そしてエジプトで、とても関心を持った。独裁の中で人々がどうやって生きていくかを知った。自分なりに信仰はあるが、神よりも魂を信じている。
- ②“郊外の若者”から浮かぶのは“危険な郊外”。それは、郊外の若者のメディア報道と関係している。だから、意味は否定的になる。私にとって、ヌイイは、いくつかの地区から構成された村のようなもの。別の地区の人間とは出会わない。自分達の地区で充分なので、他の地区へ行く必要がない。私はカトリックで裕福な出身の人達の中で育った。けれども、ある種の均一化があって、皆が同じような生活水準に位置しているし、典型的なフランスの家庭で、良い教育を受け、教養を身に付けている。私も同じように、他人を尊重したり、礼儀を重視するような価値観で育った。
- ③私が通った私立学校は、いろいろな郊外から来ていたが、皆、私より豊かな階層の出身で、同じようだった。脆弱な郊外の若者とも共通点はあるが、“ヌイイ vs サルセル”のようなステレオタイプがあるので、出会えない。服装も、話し方も、聞く音楽も違うので、それが差異を作る。共通点を見出すには、殻を破る必要があるが、壁は大きすぎる。ステレオタイプのせいで、以前の私はヌイイに住んでいるとは言えず、ルヴァロワの近くに住んでいると言っていた。
- ④服装は、意識してなくても、ある集団に属する印。ヌイイでは、皆同じブランドの服を着る。

¶ ウジェニ 23 歳 (91 県ジュヴィニイ=シュル=オルジュ, FEP)

- ①以前は 91 県モルサン=シュル=オルジュに住んでいたが、20 歳の時に両親が離婚して父が出て行ったので、91 県ジュヴィニイ=シュル=オルジュの中心部の静かな地区へ、母や姉妹とともに引っ越した。やがて父と弟と一緒に 91 県ジュヴィニイ=シュル=オルジュの駅近くの貧しい地区のアパートへ移った。アフリカ文化と先史時代に強い関心があって人類学者になりたかったが、一般バカロレアを取得後、社会学を勉強すると、幅の広さを知り、宗教や民族の対立に興味湧いて、社会学者を目指している。イギリスのマンチェスターに 1 年留学し、インド・パキスタン系地区で生活した。カトリックだが、12 歳でミサに行く気がなくなった。神よりも愛を信じる。両親は国民戦線なんかを支持しているが、私は影響されていないので、2007 年に左派に投票した。2012 年も投票に行くが、右派に投票しないことだけは決めている。
- ②“郊外の若者”とは、黒人、アラブ人、豊かでない人。私は、郊外人でもパリ人でもない。パリに住みたいが、横柄になって郊外人を馬鹿にしないか不安。私は郊外の民衆地域で育ったが、シテの近くだったので、インテリで金持ちの娘と思われていた。パリでは無教養な人間とみなされる。私はいつもこの 2 つの間にいる。有利な点は、異なる環境に適合できること。
- ③私と同じような郊外に住んでいる友人とは共通点がある。モルサン=シュル=オルジュ (91 県) にいた時は、静かな地域の大きな戸建てに住んでいたが、付近にはシテもあった。20 歳で、美しく村のようなジュヴィニイに引っ越した。モルサンではシテの若者と会っていたが、共通点はなく、関心も違った。シテには、黒人、アラブ人、白人などいろいろいるが、男性と外出する女性やフェミニンな服装をする女性には批判的。私はインテリ志向で勉強に関心があつたが、シテの若者は早く職に就こうとしていた。学んできたことが違うので、シテの若者の会話は関心が持てなかった。それでも、シテの若者と会うのは楽しかったし、別世界の出身なので、話すのも面白かったが、だいたいは表面的な関係だった。
- ④郊外に住んでいると、夕方から遊びに出掛けるのが難しい。パリに行くと、郊外との差が分かる。パリはいろいろあるが、郊外は何もない。パリは楽しめるし、発見もあるが、郊外は寝るだけ。パリにいと、私は郊外人と思わせられる。友人は皆パリに住んでいるので、疎外を感じない。友人と一緒に出掛けることもできない。
- ⑤郊外出身の親しい友人は私と同じ格好する。ジャージや革ジャン姿のシテの若者とは違う。言葉も、シテの若者はすごく荒い。彼ら独自の言葉を持ち、私には理解できない。いつもグループでいるので、脆弱な地区の人は皆同じに見える。シテでは、皆と同じでなければいけないから、似た格好になる。それは閉じられた世界。言葉も同じで、シテの若者と出掛けると、私にはちゃんとした仏語で話すのに、仲間と一緒にあった瞬間から、グループの言葉を使い出す。

¶ ルイ 20 歳 (94 県ノジョン=シュル=マルヌ, MEC)

- ① ずっと郊外で暮らしてきた。一般バカロレア取得後、パリのアメリカンスクールで音楽を勉強している。また、サンモールの中学校で補助指導員として働いている。父は音楽家、母は出版関係で働く。両親との関係はとても良い。両親は勉強や生活について助言し、他人や法律や文化を守るという価値観を教えてくれた。両親とも再婚していて、僕には 10 歳下の弟が 2 人いる。1 人は父が連れてきて、もう 1 人は母が連れてきた。カトリックの信仰者だが、実践者ではない。今まで選挙に行かなかったが、後悔している。2012 年はマランション (左翼党、環境保護、フェミニズム、反グローバリズム、反人種差別) に投票する。最も驚いた政治的出来事は、2002 年の大統領選でルベンが残ったことで、一種のクーデターだ。僕自身は国民戦線に全く共感しないが、人々がポピュリスト政党の考えに賛同することは驚かない。
- ② 郊外の若者と言えば、平穏でブルジョワな郊外よりも脆弱な郊外を指す。郊外のことを耳にするのは、メディアを介してか、窃盗や麻薬などの非行に関わる出来事の時だけ。それ以外の郊外は、何事も起きないので、言うことがない。シテで起きていることを見ると、僕にはチャンスがあると意識する。同じような社会的現実と直面していない。僕は郊外の若者ではないと思う。むしろ、パリ地域の出身あるいはパリ人と考えている。
- ③ “郊外の若者” というのは僕には存在しない。他のタイプの郊外の若者とは共通点がない。郊外に住むから一緒ということはない。僕と同じような郊外の若者は、僕と関心や興味が同じなので、同質性がある。他の郊外、とくに 9-3 のシテの若者は違う。差異は芸術や音楽などの文化面で大きい。この差異は、日常のメトロで出会う郊外の若者の行動スタイルにも示される。彼らは僕の文化と断絶していて、対話もない。郊外人にも諸々のタイプがある。僕のようなブチブルの若者は、特に問題も抱えず、学校で習うような一般的なフランスの文化と歴史を共有する。僕はパリ人と違わないと感じる。両親はパリに住んでいて、20 年前に大きな庭付きの家で暮らすため郊外へ引っ越した。僕の基本はパリで、パリ中心部に行って買物する。パリ人との差は、庭付きの家に住んでいる点で、それによって素晴らしい生活環境を享受している。
- ④ 僕にとって、郊外とは、庭付きの家に住んで、夏に友人とバーベキューができること。僕は、高層建築で育った若者やパリから離れたところに住む若者と違って有利。
- ⑤ 9-3 の人はラップ好きだが、ブルジョワの間では歌謡ポップの“フェニックス^{xi}”だ。今は、社会集団によって嗜好が細かく分かれる。服装についても、コード化されたシテのスタイルがあるが、それはシテの若者だけのもの。僕や友人はフード付きのスポーツウェアは着ないし、僕達にとってはアンチスタイル。
- ⑥ シテの若者が文化や流行の創出を先導しているとするれば、社会全体の中ではなく、彼らの中だけ。シテの若者は社会集団の 1 つで、彼らだけに属するコードによって、ますます孤立していく。極限まで行って、その結果、他の社会集団と掛け離れ、閉鎖的になっている。これは、雇用での不利をもたらしているもので、残念。

¶ リュカ 22 歳 (92 県ブローニュ=ビヤンクール, MEC)

- ① 父は技師で、母は広報関係で働いていた。以前はシテもあったが、今ではブルジョワ化し、社会的混合を無くしてしまい、右派に投票するようになったブローニュ=ビヤンクールで、ずっと暮らしてきた。一般バカロレアを取得し、パリで法律を学び、その後、オランダのロッテルダムで勉強を続けている。妹がいて、信頼している。最も驚いた政治的出来事は、2002 年大統領選でルベンが決選に進み、国民全体に反ルベンの運動が生じたこと。僕もルベン反対のデモに参加した。フランスはサッカーの試合以外はナショナリストではなく、フランス人はフランスの多文化主義に誇りを持てるはずだし、それが長所だ。多文化主義に関しては、より寛容なアメリカの例を学ぶべきだろう。
- ② 問題を抱える若者、脆弱な状態にある若者、将来の展望がない若者のこと。つまり、不利な境遇にある郊外出身の若者のこと。多くの人がそう思うように、僕自身もパリ人だと考える。パリは出掛けの所、郊外は寝る所。パリは自分自身のアイデンティティ。
- ③ 彼らは隣に何があるか知らないような環境で育った。彼らはいつも同じ所で暮らしている。環境は異なるが、僕にも彼らにも不安はある。僕は同じ所に一生住むのは嫌だが、彼らには選択肢がない点が違う。
- ④ 僕は排除されていない。中の上の階層の人間は未来が保証されている。そうした人間は問題がなく、問題を抱えたシテの若者に関心を示さない。
- ⑤ 僕達の世代は、ナショナル・アイデンティティの変化など、社会の大きな変化を体験してきたが、こうした論争は収束させなければならぬ。理解し合えば、より分かりあえる。
- ⑥ シテの人間は流行に影響を与えるので、文化を先導している。僕の友人の 1 人は、僕と同じ階層の出身で、雑誌を作ったが、郊外のラップ文化に関心を持っている。郊外のラップ文化は富裕階層にも影響する。言葉もラップと同じで、僕も逆さ言葉を使うし、“キフエ”と言う。

¶ ラファエル 22 歳 (93 県ロマンヴィル, MEP)

- ① 初めはモントルイユ、次にロマンヴィルに暮らした。高校まで行ったが、バカロレアは取得しなかった。そして、テレビゲームとアニメーションの制作を教える私立学校に入った。両親は僕が 7 歳の時に離婚。建設業で働く父はほとんど何もしてくれなかったが、通信会社で働く母はいろいろ与えてくれた。母は僕と一緒に暮らし、新しい夫との間に娘が 1 人いる。父は新しい女友達との間に息子が 3 人いて、僕は時々会う。母の前の夫にも子供がいるが、僕とは交流がない。カトリックの信仰者だ。母がフェミニストなので影響を受けたが、2007 年大統領ではロワイヤルではなく、サルコジに投票した。最も驚いた政治的出来事は、女性が大統領になるかもしれない 2007 年フランス大統領選と、黒人が世界的大国のトップに立ったアメリカ大統領選。とくにオバマ大統領の誕生はアメリカに大きな変化をもたらしたし、フランスやその他の世界も、自分の国のことのように感じた。
- ② 僕は 15 年間 93 県に住んでいる。最初はモントルイユ、次にロマンヴィル。僕にとって、郊外の若者と言えば、シテ、暴力、持たざる人々が浮かぶ。これはステレオタイプだと分かっている。僕は郊外といっても、シテには住んだことがないので、こうした例に当てはまらない。僕は郊外の若者とは関係ない。僕は裕福な家庭に生まれた。郊外の若者というのは、むしろ社会的な範疇のことを指す。
- ③ 僕には、モントルイユの若者との類似性はないし、関連性もない。僕が今通う専門学校はパリにあり、高校はヴァンセンヌにあった。僕は私立にしか行っていない。モントルイユに友人はいなかった。外に目を向けていた。モントルイユの若者はラップや R&B を聴き、ジャージ姿で、麻薬を吸い、暴力的。僕も一度、理由もなく殴られた。ジーンズにコンバースのシューズという、パリの古典的でブルジョワ風の恰好をしていたからだ。僕はラップ以外の音楽を聴く。ラップは、いつもシテのことばかりテーマにして、つまらないから。
- ④ モントルイユでは、マイノリティだったので、居心地が悪かった。彼らとは服装も違い、僕の町ではなかった。メディアが一般化して 93 県を説明するが、暴力や麻薬が多いのも事実。そうした 93 県と僕は関係ない。しかし、僕のパリの友人達は、僕を郊外人と見ていて、どうやって暮らしているのか不思議に思う。友人達が僕の家に来ても、安心しない。友人達にとって、郊外は恐ろしいが、それはメディアの影響を受けているから。僕には自分自身の意見がある。ロマンヴィルは静かなので落ち着く。
- ⑤ 若者は、シテの若者が発明した逆さ言葉や罵り言葉をよく使う。それはオリジナルなもので、変化するが、創造性はある。音楽や服装に関しては、アメリカの都市の影響が強い。
- ⑥ 僕の服装はクラシックで、大衆に合せている。モントルイユに住んでいた時は、自宅からメトロの駅まで、ポボ^{vi}と見られないように、フード付きパーカーを着なくては いけなかったが、メトロに乗ったら脱いだ。

¶ ヴィオレット 18 歳 (78 県シャトーフォール, FEC)

- ① 小学校 5 年からフランス=ドイツ系の私立学校で学んできた。フランス人としての意識は弱く、ヨーロッパ人としての意識が強い。最初は 78 県のニュータウンであるギューヤンクール²⁾の戸建て地区に住んでいたが、8 歳から 78 県のヴェルサイユの近く、シャトーフォールの村に住んでいる。パリの政治学院²⁾に入ることができたが、通学に不便なので、パリに移るかもしれない。父は俳優で、母は不動産業。父と母は考え方が対立し、私はその中間に位置する。同じ家に暮らす、皆が個人主義。弟もいるが、考え方が異なるので、意思の疎通が難しい。家族よりも恋人を信頼している。黒人系の友人はいない。私はカトリックの信仰者でも実践者でもない。宗教的な教育を一切受けていないが、聖書は文化の一部なので、そのことは残念。義務と考えるので、2012 年の選挙には行き、左派に入れると思う。最も驚いた政治的出来事は、2002 年大統領選で決選にルペンが進んだこと、そしてオバマ大統領の誕生。2002 年 4 月 21 日は、私が 10 歳の誕生日で、両親は深刻になり、父は外に出て「くそつたれの国」と叫んだのを覚えているし、人々が泣いていたのも記憶に残っている。オバマ大統領の方は、これから生じる大きなものを感じる事ができた。
- ② 郊外の若者というと、すぐ軽蔑的なイメージになる。つまり、危険な郊外、暴れる若者が浮かぶ。「若者」という表現は好きではない。というのも、多くの人にとって、それは考えのない人、何でもする人を指すから。「郊外の若者」と言われても、私には関係ないし、私はそういう表現を決して使わない。もし使ったら挑発的になる。ヴェルサイユでは、郊外に住んでいる印象はなく、むしろ良い境界に住んでいるという印象。私が今いる所は、都市と同じ精神風土ではない。社会的混合は全くなく、同じような人々が十分な収入で暮らす。黒人も、アラブ人も、HLM もない。都市から遠くない田舎だが、分譲戸建て地区のようなベッドタウンではない。私はそこで育つことができ、素晴らしい子供時代だった。でも、殻の中に閉じこもっていた。若者期になると、私は孤立を感じた。私の村には、商店も、交通も、何もなく、親に頼っていた。今は、政治学院から自宅へ帰るのに 1 時間 15 分掛かるので、パリで部屋をシェアするかもしれない。結局、私はヴェルサイユ人というより、パリ人と感じている。
- ③ シテの若者の所に行かないので、共通点があるか無いか分からない。私は殻の中で育った。友人は皆白人で、皆裕福な親がいた。政治学院に入ってから、他の生き方が見えるようになった。政治学院には社会的混合がある。それに、私の父は刑務所で働いているので、他の人達と私達の生活水準の違いを話してくれる。父は、不十分な環境で勉強してきたためにあまり読み書きのできない若者のことを語ってくれる。私は十分な環境だったので、チャンスを多く与えられている。
- ④ シャトーフォールの人は社会的混合を望まないし、新しい変化を好まない。
- ⑤ 文化は細分化されている。シャトレでは、多くの郊外の若者を見掛けるが、彼女達の服装は私と違う。服装には異なる 2 つの世界がある。そして、彼女達はすぐ汚い言葉を発して罵り合うが、私達はこうした行動をしない。
- ⑥ 服を着るのは、皆自分が属しているグループを示すため。私はダブダブのズボンは買わないし、大きなイヤリングもしない。こういう恰好は好きじゃないが、それは私とは別のグループの人達がするから。

注) 表中のアルファベットを付した箇所について、以下説明しておく。

- A) 2005 年に 93 県のクリシエス=ボワから全国に拡大した暴動は、次の出来事が発端だった。10 月 27 日、郊外団地の少年達は、競技場でサッカーをした後、連れだって家へ帰る途中だったが、それを見た市民が不審に感じて通報したので、警察が来た。少年達は、日常から警察の行為に疑問を持っているので、逃げた。チュニジア系の 17 歳ズィエッド・ベナ Zyed Benna、モーリタニア系の 15 歳ブナ・トラオレ Bouna Traoré、クルド系の 17 歳ムイッタン・アルタン Muhittin Altun の 3 人は変電所に逃げ込み、ズィエッドとブナが感電死し、ムイッタンが重傷を負った。感電死した少年が住んでいたのがクリシエス=ボワのシェンヌ・ボランテュ団地で、暴動もそこから始まった。
- B) 「職業バカロレア baccalauréat professionnel」は、高校の職業科の生徒を対象とした高校段階修了資格で、取得者の多くは就職する。
- C) 宗教の「信仰者」と「実践者」の違いは、注 15) を参照。
- D) 「ブール Beur」はマグレブ系二世、三世を指す。近年はマグレブ系二世、三世の女性を「ブレット Bourette」と呼ぶ。ブールは「アラブ人 Arab」の逆言葉だが、アラビア半島から北アフリカへ来たアラブ人だけでなく、それ以前からいたカビル人やベルベル人も含まれる。
- E) 「スキンヘッド skinhead」は「スキン skin」とも言い、凶暴な極右のこと。また、「セーヌ川へ投げられた」は、フランス現代史のタブーの事件を比喩的に使ったと思われる。すなわち、1961 年 10 月 17 日、祖国独立を求めるアルジェリア人の多くがセーヌ川に投げ込まれた虐殺事件があった。
- F) 「技術バカロレア baccalauréat technologique」は、高校の技術科の生徒を対象とした高校段階修了資格で、取得者の多くは工業、農業、経理、医療、観光などの方面で勉強を続ける。
- G) 「Permis de Vivre la Ville」は、注 23) を参照。
- H) 「シテのレクシク」の書誌情報は、注 22) を参照。
- I) ちなみにスカーフを被る場合には、父親や夫から強要された結果であることもあれば、イスラム女性の政治的行動であることもあるし、自身の個人的な嗜好のこともある(荒又, 2011)。
- J) 「ボワット=シス boîte de 6」は、6 人くらい乗れる箱ということで、ワンボックス型の警察車両を指す。詳しくは *Lexik des cités*, p.71 を参照。
- K) 「ウェシュウェシュ wesh wesh」は、「シテ言葉」のことを指す。「ウェシュ wesh」については、注 24) を参照。
- L) 「HLM」は低家賃集合住宅 Habitation à loyer modéré のことで、社会住宅会社が公的に提供するもの。郊外団地は基本的に HLM。
- M) 「バー barre」は横長の大型アパートで、外観は第 2 図を参照。編集者が若者のプロフィールを書く際に誤って「バー」としたのかもしれない。
- N) 郊外団地では大型の建物を取り壊す再生事業が多いが、その際の行政と住民の見解は、森 (2014, pp.145-192) が詳しく調べている。
- O) 「タワー tour」は縦長の高層アパートで、外観は第 2 図を参照。
- P) 「キフエ kiffer」は、注 24) を参照。
- Q) 「普通バカロレア baccalauréat général」は、高校の普通科の生徒を対象とした高校段階修了資格で、取得者の多くは人文科学、社会科学、自然科学の方面で勉強を続ける。
- R) 「失せろ、バカ casse-toi pauvre con」は、注 27) を参照。
- S) 庶民的な地域が多い 94 県だが、「サンモール(サンモール=デ=フォッセ)」は例外的に非常に裕福な町として知られている。「ヴァンセンヌ」も森に隣接して居住環境の良い町とされる。
- T) 「ラムナス Lamenas」は、「ラ・ムナス La Menace(威嚇, 不安)」と発音する(*Paroles libre de... jeunes de banlieue*, p.21)。ラムナスは、パリ南郊の団地を取り上げ、シテ言葉を使う典型的な郊外のラップと言える。郊外の文化活動サイト「Banlieues Créatives」では、次のように紹介されている(<http://banlieues-creatives.org/portfolio-items/la-rage-de-dire/?portfolioID=88>)。「24 歳にしてラムナスは経験豊かなラッパーで(ビデオクリップ「Wesh we can」を見よ)、パリ南郊の出身だ。15 歳から書くことが好きで、努力、団結、敬意といった価値観を表現する質の高いラップを作っている。それは、彼自身がソーシャルワーカーとして手助けするシテの若者達へのメッセージだ」。なお、「Banlieues Créatives」は 2006 年に開設され、名称は、『郊外の若者の自由な発言』を編集したジャーナリストのアンヌ・ドクワが 2006 年に出版した同名の書から来ている(<http://www.presseetcite.info/ressource/initiatives/banlieues-creatives-un-site-internet-pour-valoriser-les-quartiers>)。また、「Banlieues Créatives」は、カンデの発言に出てくる「ペルミ・ド・ヴィーヴル・ラ・ヴィル」によって運営されている。
- U) 「フランス・キュルチュール France Culture」も、「フラン・サンフォ France Infos」も FM 局で、日本で言えば前者は NHK の教育番組、後者は総合番組に近いが、NHK よりも、それぞれはるかに教養とニュースに特化している。
- V) 「RER」は Réseau Express Régional の略で、パリ中心とパリ郊外を縦横に結んでいる近郊高速鉄道網のこと。郊外団地の若者はこれを使って郊外からパリに出掛けることが多い。
- W) 「パリ 16 区」はパリで最もブルジョワ的な空間を象徴する場所。
- X) 「フェニックス Phoenix」は、豊かな郊外であるヴェルサイユ周辺の若者によって 1999 年に結成されたポップな音楽グループ。
- Y) 「ボボ Bobo」は「ブルジョワ&bohème bourgeois-bohème」のことで、年齢が比較的若く、収入がそれなりにあり、知的な流行や文化的な事柄に関心の高い人々を指す。都市中心部の古い地区に移り住み、ジェントリフィケーションを進める層になる場合が多い。
- Z) 「パリ政治学院 Sciences Po」は、国立エリート養成教育機関の 1 つで、パリ大学などの一般の国立大学と違って、入学が難関とされる。

第4表 アラブ=アフリカ=アンティル系の若者の捉え方

名前, 年齢, 民族 (居住地と居住歴)	郊外団地	9-3	パリ	ヌイイ	ブルジョワ郊外
アブデル, 22 歳 モロッコ系 (93 県クリシ=スウェ=ボワ ⑨のシェンヌ・ボワンテュ 団地)	困難／若者は仕事を見 つけにくい／劣悪な環 境／活気がない／何も ない／道を外す人もい る				
イシェム, 20 歳 アルジェリア系 (91 県エヴリ⑦のボワ・ソ ヴァージュ団地)	貧困／困難に立ち向か う勇気がある／自分 には、シテの友人も、ブル ジョワ地区の友人もい るし、フランス人・プー ール・黒人の友人もい る． [混合]／エアマックス を必ず持つ／言葉・服 装・音楽を創造する／ 帰属意識のために、同 じ格好をする若者もい る[均質]		パリ人は平日に学 校へ通って、週末 は遊ぶ／パリに以 前はコンプレックス を感じたが、今は ない	ヌイイは富裕 ／ヌイイ人は 穀の中[閉鎖] で別世界／ヌ イイの若者も 心地良いシテ のラップを聴 くし、それを介 して郊外を知 る／ヌイイの 若者だけエア マックスを持 たない	富裕／経済的 な問題を抱えな い
カンデ, 24 歳 マリ系 (91 県エヴリ⑦のボワ・ソ ヴァージュ団地)	文化的混合は長所／ 黒人・アラブ人・インド 人がいて、皆が知り合 いで、コミュニケーション が容易[紐帯]／社会 の中に流行の言葉を創 る			ヌイイは富裕 でパリに近い ので、郊外で はなくパリ／ ヌイイ人は裕 福／ヌイイの 若者も自分達 と同じ話し方 をすると思う	富裕地域では 皆が知り合いと いうことはない [閉鎖]／文化 的混合がない [均質]
メリサ, 17 歳 アンティル系 (93 県ボンディ⑥のノール 団地→93 県ボンディ⑥の 中心部)	社交的で、皆知り合 いで、コミュニケーション が容易[紐帯]／皆自 分のスタイルがある／ 文化を創造できるのが 誇り／取り壊し前のボン ディ・ノール地区は良か ったので懐かしいが、 ボンディ中心部は静か でも活気がない		パリの若者と郊外 の若者は暮らし方 が違う		
ンファンテ, 20 歳 ガンビア系 (94 県クレティユ⑥のル・ パレ団地)	文化的混合／飛び地 ／皆知り合いで、助け 合う[紐帯]／脆弱、居 住地の選択肢がない／ 人々はクレティユでは 自分の家を感じる／外 に出ようとする意識 [閉鎖]／若者は郊外 人を誇るが、アイデン ティティを強く出しすぎ る[均質]／音楽は創造 するが、言葉は創造し ない		パリは別世界で、 周囲にはパリに行 こうとしない人が多 い／パリで受け入 れられるか分から ないので、別世界 に感じる人が多い ／自分にはパリと の壁はない／パリ は郊外から抜け出 る先／パリを自分 の家と感じ、文化 を受容している	ヌイイの人に は居住地の選 択肢がある	富裕／居住地 の選択肢があ る
サイード, 24 歳 アルジェリア系 (93 県スタン⑩のル・クロ・ サンラザール団地)	困難／非行／職を探そ うとする若者／流行が 模倣される	前は 9-3 には 他の郊外と違 う服装スタイ ルがあった が、今はそう ではない		ヌイイの若者 も自分達と同 じ格好をする	
ヴァンサン, 22 歳 アルジェリア=スペイン系 (91 県マッシィ⑩の団地 →92 県アントニ①のレ・バ コネ団地)	ゴロツキ風の服装と風 貌をした若者／混合／ 強い絆／皆知り合い [紐帯]／音楽を創造す る		シテには混合があ るので、パリと郊外 に大きな断絶はな い／パリの服装を シテが真似ることも ある	ヌイイは別世 界／ヌイイの 若者は勉強は 続けられる／ ヌイイでは価 値観が違う	戸建てに住む 人々は別世界

注)「民族」はあやふやな概念だが、両親の少なくとも一方が、いわゆる「元々のフランス人」とされる場合以外を示した。アンティル系は何世代も前からの紛れもないフランス人だが、遠い昔にサブサハラ出身だった人が多いので、ここに含めている。なお、カンデは、パリジャン紙の記事では、エヴリ⑦のボワ・ソヴァージュ団地に住んでいると紹介されているので(<http://www.leparisien.fr> - 2005.12.13)、この情報も加えた。また、[]内は、発言の内容を位置づけるために筆者が記した。町に付した丸数字は第1図を参照。

第5表 ヨーロッパ系の若者の捉え方

名前, 年齢, 民族 (居住地と居住歴)	郊外団地	9-3	パリ	ヌイ	ブルジョワ郊外
シャルロット, 24 歳 ニュージールランド系 (92 県ヌイ=シュル=セ ーヌ ¹³)	危険／サルセル vs スイ イのイメージある／服装 も音楽も違う			村／閉鎖的 ／居住地はヌ イと言えず, ルヴァロワと 言っていた／ ヌイ vs サル セルのイメ ージある／ヌ イでは皆同じ ブランドの服 を着る[均質]	富裕／カトリック ／同じ生活水 準／均質／教 養と教育がある ／他人と礼儀を 尊重する／典 型的なフランス の家族
ウジェニイ, 23 歳 (91 県モルサン=シュル= オルジュ ¹⁰ →91 県ジュヴ イシイ=シュル=オルジュ ⁹ の中心部の静かな地区 →91 県ジュヴィシイ=シュ ル=オルジュ ⁹ の駅前の 貧しい地区)	脆弱／郊外の若者とは 黒人・アラブ人・貧しい 人のこと／シテでは黒 人・アラブ人・白人が混 じる[混合]／帰属意識 のため格好や言葉が同 じ[均質]／閉じた世界 [閉鎖]／言葉が荒い ／若者は早く仕事に就 く／女性に抑圧的／シ テの若者は別世界で, 話すのは面白いが, 表 面的な関係に留まる		パリにはすることが 多くある／パリでは 楽しめるし, 発見 がある／パリでは 自分が郊外人と思 わされる／パリと郊 外は違う		何もない／夜 に出掛けられな い[閉鎖]／パリ と郊外は違う
ルイ, 20 歳 (94 県ノジョン=シュル= マルヌ ¹⁴)	脆弱／非行が多い／ 自分と共通点がない／ シテの若者だけのコード がある／自分達のコード を強調するので, 閉鎖 的になり, 社会で 孤立する	9-3 の若者は 芸術・音楽・ 行動が違う／ 9-3 の若者は ラップが好き で, フード付 きパーカーを 着る	パリは庭付きに住 めないだけで, 他 の点ではパリと自 分の郊外は同じ		平穏／チャンス が多い／庭付 きの戸建てに 住める／均質, 問題を抱えな い／一般的な フランス文化・ 歴史を共有し, パリ人と違わ ない／音楽は歌 謡ポップ志向
リュカ, 22 歳 (92 県ブローニュ=ビヤ ンクール ² の戸建て地区)	脆弱, 問題を抱える／ 居住地の選択肢がない ／流行・文化・音楽・言 葉を創る／自分も逆さ 言葉を使う		パリは出掛けてい く所で, 郊外は寝 る所		居住地を選べ る／将来が展 望できる／パリ は出掛ける所, 郊外は寝る所
ラファエル, 22 歳 (93 県モントルウイユ ¹¹ →93 県ロマンヴィル ¹⁵)	暴力／持たざる人々／ 自分とは無関係／ラッ プを聴き, ジャージを着 て, 麻薬を使い, 暴力 的／言葉は独自に創 造するが, 音楽や服装 は米国都市の模倣	9-3 は暴力・麻 薬／自分と無 関係／自分 はモントルウ イユではマイ ノリティで疎外 されたが, ロマ ンヴィルは静 かで良い			
ヴィオレット, 18 歳 ドイツ系 (78 県ギューヤンクール ⁸ →78 県シャトーフォル ⁴)	危険／暴れる若者／服 装が違う／言葉遣いが 汚い／自分とは無関係		入学できたパリの 政治学院には社会 的混合があり, 他 の生き方を知った ／シャトレで多く見 掛けるシテの若者 は, 流行の点で自 分とは別世界		何も無い村／ 孤立／殻の中 [閉鎖]／富裕 ／均質／社会 的混合の欠如 ／黒人・アラブ 人・HLM の不 在／混合・変化 を望まない 人々／ヴェル サイユは郊外と いうより, 平穏 な場所

注)「民族」はあやふやな概念だが, 両親の少なくとも一方が, いわゆる「元々のフランス人」とされる場合以外を示した。ヴィオレットは高校まですべてフランス=ドイツ系の私立学校だったので, おそらく両親のどちらかがドイツ系と思われるので, そのように記した。なお, ヴィオレットの住んでいるシャトーフォルは、『郊外の若者の自由な発言』では「77 県」と記されるが, これは誤りなので, 「78 県」とした。また, [] 内は, 発言の内容を位置づけるために筆者が記した。町に付した丸数字は第 1 図を参照。

2. 郊外の性質の違い

13名の若者の発言を個別に検討していくと、郊外という空間は、郊外団地とブルジョワ郊外の対比だけでは把握できない側面が見えてくる。いくつかの空間的なキーワードを手掛かりにしてみよう。

郊外を構成する空間的なキーワードは複数ある。まず、「シテ cité」,「カルチエ quartier」,「ホットな郊外 banlieue chaude¹⁶⁾」などで示される「郊外団地」,「戸建て pavillon」,「富裕地区 quartier chic」,「ブルジョワタウン ville bourgeoise」などで示される「ブルジョワ郊外」がある。その他、「9-3」,「パリ」,「ヌイイ」といったキーワードも見出せる。「9-3」は93県のことで¹⁷⁾,アラブ=アフリカ=アンティル系の多い地域を代表し,「ヌイイ」は裕福な階層の多い地域を象徴し,「パリ」は「9-3」と「ヌイイ」の双方から対比される。この3つの場所も含めて5つの場所が¹⁸⁾,若者の発言で関連づけられている。

場所が評価されたり、相互に関連づけられると、そこに空間言説が発生する¹⁹⁾。ただし、空間言説には、若者の意識から出てくるものだけでなく、インタビュワーの質問に促されるものもある。例えば、「④服装・言葉・音楽・政治的意見に関して世代的なアイデンティティがあるか」,「⑤シテは流行を先導しているか」という質問がある以上,「シテ」がフランス社会で文化を創造し先導する,という言説は当然増える。また、郊外団地は「別世界」,ブルジョワ郊外は「別世界」といった言い方も少なくないが、これは「②あなたとは異なる他の郊外の若者との共通点はあるか」などの質問に対して予想される言説だろう。そこで、インタビュワーが質問の中で示していないのに、若者達が積極的に言及する事柄に注目してみたい。

個々の表現は異なるが、④人々が社会文化的に多様だという混合性、⑤住民同士が知り合いで相互の交流や扶助があるという紐帯性、⑥同じ経済的水準や文化的嗜好から構成されるという均質性、⑦外部からの隔絶、内部での多様性や交流の少なさ、居住地への強い帰属意識などによって示される閉鎖性、の計4つの概念が多く、若者によって語られる。この4概念を、13名の若者は、郊外団地、9-3、パリ、ヌイイ、ブルジョワ郊外の5つの場所に対して、どのように当てはめているのだろうか。表に整理してみた(第4表、第5表)。

13名の発言では、紐帯性は正の性質、混合性はほぼ正の性質であり、均質性には正負の両面があり、閉鎖性は負として扱われている。混合性は統一感の

欠如として負になる場合、紐帯性は濃すぎる人間関係として負になる場合、閉鎖性は安心感の確保として正になる場合もあるが、13名の意識では、紐帯性は好ましいもの、混合性もほとんど好ましいもの、閉鎖性は避けたいものとされている。現代フランスの若者はリベラル志向が強く、混合性や紐帯性を肯定し、閉鎖性を疑問視することが多い。

民族別に見てみたい。アラブ=アフリカ=アンティル系では、郊外団地の性格として、4名が正の混合性と紐帯性を指摘するが、同時に2名が正負と関係しない均質性、1名が負の閉鎖性を挙げる。ブルジョワ郊外に対しては、2名が閉鎖性、1名が均質性を述べ、すべて負と見る。一方のヨーロッパ系では、郊外団地について、2名が閉鎖性、1名が均質性、1名が混合性を指摘し、すべて負と考えている。ブルジョワ郊外に関しては、3名が負の閉鎖性、3名が正の均質性、1名が負の均質性を挙げる。

ここから、次の構図が描ける。混合性と紐帯性は、アラブ=アフリカ=アンティル系が自らの居住場所を語る際に持ち出す概念だが、ヨーロッパ系は郊外団地に混合性や紐帯性があっても、インタビューでは言及しない。混合性や紐帯性は、若者の意識では否定しにくい概念なので、最初からそれを口に出さないことで、郊外団地を暗に否定しようとしているのではないか²⁰⁾。唯一、混合性に言及しているのは、ウジェニイだけだが、閉鎖性と連動するものとして、負の評価を与えている。

閉鎖性と均質性は、アラブ=アフリカ=アンティル系の場合、郊外団地にも、ブルジョワ郊外にも用いられる。ヨーロッパ系の場合も、閉鎖性は、ブルジョワ郊外にも、郊外団地にも使われるので、捉え方はアラブ=アフリカ=アンティル系と等しい。一方、均質性では評価が逆になる。ヨーロッパ系では、4名中3名までがブルジョワ郊外の均質性を好ましいものと判断している。

つまり、アラブ=アフリカ=アンティル系も、ヨーロッパ系も、他者の世界については、均質性と閉鎖性を理由に否定するが、自己の世界については、アラブ=アフリカ=アンティル系は混合性や紐帯性の点で肯定し、ヨーロッパ系は均質性の点で肯定するという違いがある。また、どちらも他者の長所にはあまり触れようとしない。とくにヨーロッパ系の方が、より他者の長所を無視し、他者を拒む傾向が強い。その証拠に、ヨーロッパ系の6名中5名までが2つの郊外間の断絶を強調している。一方、アラブ=アフリカ=アンティル系では、違いを指摘する3名

は2つの郊外に同じ側面がある点も付け加える。そして、残り3名は郊外団地とブルジョワ郊外の違いは述べていないし、サイドに至っては郊外団地とブルジョワ郊外の若者に差があるわけではないと主張する。メディアでは、アラブ=アフリカ=アンティル系の若者の閉鎖性がよく指摘されるが、インタビュー集では、ヨーロッパ系の若者の閉鎖性の方が目立つ。これは13名の若者の発言から抽出された新しい発見と言っているのではないのか。

混合性、紐帯性、閉鎖性、均質性のレトリックは、民族に言及する際にも現われる。ヨーロッパ系のウジェニイは、「黒人、アラブ人、白人」がいるので雑多であり、それが無秩序的な性格を創出し、郊外団地の閉鎖性に繋がると言い、ヴィオレットは、「黒人、アラブ人、HLM」がいないから、ブルジョワ郊外は均質性を示していると述べる。他方、アラブ=アフリカ=アンティル系のカンデは、「黒人、アラブ人、インド人」がいるから紐帯性と混合性が保たれているとし、イシエムは、「フランス人、ブール、黒人」の混合性が郊外団地の特質だと指摘する。4人とも、民族について発言する場合は「黒人、アラブ人、+α」の形になっていて、「+α」を何にするかは個人の判断に基づいている。他方、混合性をどう評価するかは、アラブ=アフリカ=アンティル系とヨーロッパ系で大きく異なっている。

ところで、ヨーロッパ系でありながら、ブルジョワ郊外の均質性に否定的な若者が1名いる。ヴィオレットで、彼女はパリから離れた遠郊の人間であることも関係し（第1図）、パリの政治学院に通学するようになって、自分が暮らす郊外の居住地には無かった社会的混合をパリに見出している。ヨーロッパ系がブルジョワ郊外に疑問を抱く時、そこにはパリとの対比がある。やはりパリから遠い郊外のウジェニイは（第1図）、郊外の居住地を何もなく夜も出掛けられない場所とし、パリのように発見や楽しみのある場所ではないと語っている。それに対して、自身が住む郊外を同質的とするルイは、郊外であっても、一般的なフランスの文化・歴史を共有しているので、パリ人と変わらないという言い方をする。ブルジョワ郊外とパリの近さを強調する彼のレトリックの裏には、フランスの文化・歴史から郊外団地だけを除こうとする意図と同時に、パリに隣接する郊外に住んでいるという現実もある（第1図）。

他方、アラブ=アフリカ=アンティル系では、ンファンテが、シテには外に出ようとしないう意識があるが、自身はパリに出て、パリの文化を受容し、パリ

を自分の家とも感じている。彼女にとって、パリは可能性の場所で、郊外団地の閉鎖性と対比される。ヴァンサンは、郊外団地は混合性の場所であり、その点でパリとの間に大きな断絶はないと述べている。つまり、彼の捉え方では、パリは多文化社会と社会的混合が進んでいるので、混合性の高い郊外団地との違いが消失することになる。

パリに言及するのは13名中8名で、この8名のうち、アラブ=アフリカ=アンティル系の4名中3名、ヨーロッパ系の4名中3名が、郊外とパリとの差異を指摘している。そういう意味で、郊外団地、ブルジョワ郊外を問わず、郊外の若者にとって、パリと郊外の差は大きい。ただし、誰一人としてパリを否定する者はいない。パリは、郊外にあるような閉鎖性が見られない場所、あるいは郊外にあるような混合性や同質性が強くある場所と評価されている。言い換えれば、アラブ=アフリカ=アンティル系とヨーロッパ系の双方の若者がパリを自分達と関連のある場所と見ようとしている。

ところで、ブルジョワ郊外の均質性に否定的なヴィオレットだが、彼女だけが、パリを1つの場所として捉えるのではなく、よりローカルなスケールでシャトレ界限²¹⁾という場所を持ち出し、そこには郊外団地から出掛けてくる若者が多く、行動や服装が自身と異なると見ている。ヴィオレットにとって、シャトレは、空間的にはパリだが、社会的にはパリに含まれない場所と認識される。このように、パリの中に境界を引くのは、ヨーロッパ系の彼女だけであり、ここでもまた、メディアが流布するイメージとは違い、ヨーロッパ系の若者の方が社会の分断を進めている可能性がある。ヴィオレットが住むシャトーフォールは、非常に静かで、ほとんど地方の村と言えるような様相を呈している。村的な地域、外国人の少ない地域では、ヨーロッパ系移民よりも、アラブ=アフリカ=アンティル系移民に対する反発が強いが、こうした背景も多少関係しているのではないのか。

3. 他者的な場所への意識

アラブ=アフリカ=アンティル系の若者にとって、他者的な場所はヌイイとパリだろう。イシエム、カンデ、ンファンテ、ヴァンサンは、ヌイイを富裕で人生上のチャンスが多い別世界とみなしている。同時に、イシエムとカンデは、音楽や話し方などの文化面では郊外団地とヌイイに共通項があると考え、サイドも服装はヌイイの若者も郊外団地の若者も

変わらないと主張する。すでに分析したように、アラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者には、経済面では郊外団地とブルジョワ郊外の格差を認めるが、文化面ではできるだけ差異を小さく考えようとしている者もいる。

パリに関しては、メリサのように郊外団地との差を指摘する意見も、ヌファンテのように別世界とする意見もあり、他者的な場所であることは間違いない。それでも、ヴァンサンはパリと郊外団地の類似性を強調し、ンファンテはパリと郊外団地の壁は越えられると考え、イシエムは以前と違ってパリへのコンプレックスは無くなったと述べる。

一方、ヨーロッパ系の若者にとって、他者的な場所は 93 県とパリだろう。93 県については、ルイとラファエルだけ述べている。メディアが頻繁に 93 県に言及する事実を考えると、やや奇妙に感じられるが、おそらく『郊外の若者の自由な発言』に登場するヨーロッパ系の若者は、郊外団地の象徴とされる 93 県に触れたくないか、郊外団地の地域を 93 県だけに限定していないのではないか。いずれにしても、93 県について述べるルイとラファエルには、捉え方の違いがある。94 県に住むルイは、93 県の若者を、フード付きのパーカーを着て、ラップを好むというように、ステレオタイプで語っている。そして、93 県の若者に対する共感はなく、居住地も異なるので、完全に無関心の対象となっている。それに対して、ラファエルは、93 県に住んでいるので、日常的に郊外団地の若者と遭遇する機会がある。そして、自身の個人的な経験から、93 県は暴力や麻薬の巣として、否定的な態度を示す。

パリに対して、ヨーロッパ系の若者が抱くイメー

ジは、93 県に対するイメージよりも複雑と言える。パリにコンプレックスを持ち、パリで疎外感を抱くウジェニィ、郊外に住んでいるが、実質的にはパリと同じ暮らしをしていると主張するルイ、パリは出掛ける所で、郊外は寝る所と言うように区別を付けるリュカ、パリの学校で勉強し始め、それによって視野が広がったと喜ぶヴィオレット。どの若者も、パリに高い価値を置いている。ブルジョワ郊外といっても、パリのような便利さや解放感はないし、郊外と言えば郊外団地のイメージで表わされるため、強くパリを意識するのではないか。

『郊外の若者の自由な発言』は、多様な郊外像を示すことが目的の 1 つだったが、若者の発言からは郊外とパリの差異が明らかになった。ここで、郊外団地の若者にとってのパリの意味について、トゥリュオン (Truong, 2012) の論文を取り上げたい。

トゥリュオンは、93 県の民衆層や移民系の多い高校で 6 年間教師を務め、参与観察やインタビュー、アンケートから、高校生のアイデンティティと場所の関係を捉えた。93 県の高校生にとって、郊外とパリは、パリの環状外周道であるペリフェリックという物理的な境界で隔てられているが、RER で容易に越えることもできる。では、実態はどうか。

パリに行くかを高校生に尋ねると、「別に」、「特に」、「いろいろ」といった曖昧な答えが返ってくるという。そして、この返答の裏には、歴史文化的なパリには行かないが、自身が身近と感じるパリには行くという行動がある。見学でパリに連れて行くと、高校生達は初めて見る建築美に圧倒され、素晴らしいと思うが、同時に 93 県との差を知り、自分達にとって無縁の場所と考えて、以後は近づかなくなる。



第 6 図 夕暮れ時のレアル界限とその付近

注) 左はサンドニ通り 140 番付近、右は界限の中心で改装前の「フォーラム・デ・アール」の商業センター。

高校生達がパリを異世界と認識していることは、例えば次の語りから分かったとトゥリュオンは述べる。

(93 県は) 綺麗じゃない。建物の色はなんでもあり。ピンク、イエロー、グリーン、グレー (…。) パリはそうじゃなくて、統一したスタイルで、石も見えるし、美しいし、白いし、綺麗。(Truong, 2012, p.6)

多様性や活気を評価する際に使われる色彩の豊かさという表現(滝波, 2014, pp.159-203) が否定的に用いられ、短所にもなる色彩の欠如(白色)が逆に美や統一感として評価される点は興味深い。一方、高校生達が頻繁に訪れるパリは、レアール(シャトレ=レアール) 界限(第6 図) となっている。そして、トゥリュオンは、次のような語りを挙げる。

レアールはすごい。皆に会えるし、店も多いし、ほとんどのブランドがあるし。(…) 欲しいものは何でもあって、パリ北郊の商業センターの感じだけど、それよりずっといい。(Truong, 2012, p.9)

93 県の高校生が「パリへ行く」ことは「レアール界限へ行く」ことを意味する。そして、そこでは、好みのブランドシューズのニューモデルを探したり、ケバブやチキンナゲットを食べたり、消費行動が中心となる。反面、移民系の住民や HLM の建物が多く、郊外と似たパリ 18, 19, 20 区は、93 県を想起させるので、訪れない。93 県の高校生にとって、衣と食は選べるが、住は選べない。居住地は受動的なアイデンティティだが、ファッションとフードは能動的なアイデンティティになる。

18 区は 93 県より悪い。だから行く意味がない。一度行ったけど、若者達が何もしないでぶらぶらしていたし、道は郊外より汚い。(…) パリととりあえずのパリがあり、まとめられない。(Truong, 2012, p.13)

以上のように、93 県の高校生は、パリという地域を3 分割している。第1 に歴史や文化が蓄積し、自分達を寄せ付けないブルジョワ的なパリ、第2 に 18, 19, 20 区など移民系が多く、自分達が敬遠する民衆地域のパリ、第3 に消費と遊興の場であり、自分達が好むレアール界限のパリだ。

再び『郊外の若者の自由な発言』に戻ろう。アラブ=アフリカ=アンティル系の若者は、パリを複数の空間に分割する 93 県の高校生やインタビュー集に出てくるヨーロッパ系のヴィオレットとは違って、パリを全体的に捉え、可能性の場所として位置づけている。例えば、ンファンテは、パリの文化を受容

し、パリも自分の家の1 つと感じているし、ヴァンサンは、フランスレベルで見れば自身をパリ人と意識し、パリ発のモードも着こなすと話している(第3 表)。このように、アラブ=アフリカ=アンティル系の若者の方がパリに対して複雑な感情がない。ただし、93 県の高校生達とインタビュー集の若者達の年齢差も考慮する必要がある。後者の方が、年齢を重ねている分だけ、パリに対する見方が、日常的な行動に基づくものから、人生上の設計に関わるものに変わっている。人々の語りというのは、意識や感覚の表明の側面もあるが、人生の軌跡や経路を反映した側面もある。年齢や経験を積むにつれ、あるいは成功や失敗を経るに従い、後者の割合が増えていくと考えられる。

IV 境界を乗り越える意志

1. 自由な発言に見る積極性

インタビュー集では、郊外団地の「コード」という表現が散見される。強く言えば「掟」や「決まり」、弱く言えば「印」や「合図」のようなものだ。しかし、そのコードは、ヴァンサンにとっては内面的なものになっている(第3 表)。ヴァンサンは、シテのコードを内側に持っているからこそ、外見は時と場合によって、ラップスタイルにも、ジーンズスタイルにもできる。服装から、郊外団地の若者か、ブルジョワ郊外の若者かを判別できるとする発言が、インタビュー集では少なくないが、そうした図式をヴァンサンは無効にする。本稿では、発言者の発言をすべて等しく見るのではなく、示唆的、意欲的、積極的な発言を探し出し、それを他のテキストとも合わせながら、建設的な方向へ持っていくことを重視したい。要約という作業に依拠する体系的アプローチは、社会の構造を抽出するには適しているが、それだけではテキストの趣旨や目的を捉え損ねる危険がある。そこで、発言者の言説を比較して評価したり、他のテキストを読み合わせたりすることで、包括的に把握するアプローチが不可欠になる。

ここまでの分析を振り返ると、アラブ=アフリカ=アンティル系の若者の方が、先入観を崩し、2 つの郊外間、あるいはパリと郊外の差異を無くそうとする意識が高い。したがって、『郊外の若者の自由な発言』の目的は、最終的にはアラブ=アフリカ=アンティル系の若者の発言を紹介することで、社会が作り出した先入観とは異なる若者像を提起することだったのではないか。そこで、もう少し深くアラブ=アフ

リカ=アンティル系の発言に注目してみたい。

では、どんな発言に注目するのか。13人の発言を読み比べ、異なる地域や社会を積極的な視点で関係づける発言を見出したい。とくに、2つの郊外を相対化する発言、パリと郊外の壁を越える発言、他者理解を重視する発言こそが、分裂した空間を融合させる力になるし、社会の溝を埋める素地になる。序文を書いたテュラムの願いも、この点にあるに違いない。筆者としては、ともにサブサハラ系の女性であるカンデとヌファンテの2人の発言に、分断を止めるような意識が見られると考える。

なお、断っておくが、カンデとヌファンテの2人に焦点を当てるのは、2人が、郊外観に関して、興味深い発言をしていると判断したからにすぎない。

『郊外の若者の自由な発言』には、それ以外のテーマもある。そこでは、当然別の若者の発言に示唆的な内容が含まれている。

2. カンデの場合

まずはカンデの発言から追っていきこう。彼女が問いと答えを1人でこなす箇所がある。問いと答えを連続させる発言は、編集者の介在を減らし、より自由な発言を確保する行為と言える。

イメージや既成観念を基にしてはいけない。例えば私が、ヌイイには裕福な人しかいないと言うと、多分私は間違っている。私はそういう地区に行ったことがないし、そこに暮らす人々を自分自身の眼で見たこともない。(p.48)

「ヌイイには裕福な人しかいない」というのは、一般的なメディアが期待する答えだが、それは先入観であり、その証拠にカンデはヌイイを見たことも、ヌイイに行ったこともないと言う。先入観には良いものも悪いものもあるが、彼女は先入観自体が事実に基づかない点を指摘している。同じように、シテ言葉に対する先入観にも留意が必要とする。

シテの人々は言葉を発明したと思っているが、昔の仏語に由来するものも多いし、植民地化や移民流入でもたらされたものもある。(…)シテでは、アラビア語、バンバラ語、インド語、…など、あらゆるものを混ぜ、シテで話す言葉の素材にしている。(p.49)

カンデは、シテ言葉はシテに固有のものではないと述べるが、単にシテ言葉の非本質主義的な性質を主張しているわけではなく、むしろ文化的混淆性を指摘している。そして、このような考え方が出来る

ようになった理由として、『シテのレクシック *Lexik des cités*²²⁾』の編集に関わった経験を彼女は挙げる。

『シテのレクシック』というのは、1987年創設の社会団体である「ペルミ・ド・ヴィーヴル・ラ・ヴィル *Permis de Vivre la Ville*²³⁾」が中心となり、エヴリィの郊外団地に住む当時20～24歳頃に当たる1982～1988年生まれの若者(10名中サブサハラ系が8名)が協力して、2007年に刊行されたシテ言葉の本であり、いろいろな語彙が由来や意味とともに解説されている。カンデがインタビューで『シテのレクシック』に言及するのは、これも読んでほしいと社会に言いたいからではないか。そこで、少しでも内容を紹介してみよう。シテ言葉といえば、逆さ言葉の「auch」、「ouf」、「venère」、アラビア語由来の「blédard」、「kiffer」、「wesh」、仏語の意味を変化させた「galère」、「poto」、「t'as vu?」などが良く知られているが、英語由来の「bad」、クレオール語由来の「moika」、仏語の文法構造を変えた「t'inquiète」もあるし、サブサハラ諸語由来のものもある²⁴⁾。カンデが強調する文化的混淆性の例を、実際の本での紹介の仕方に沿って示したい。

Foyi [フォイエと発音する]: 「何もない」の意。例: 昨日の夜は何もすることがなくて、家にいた。しばしば「Yafoyi」の形で使われる。例: 冷蔵庫に何もないから、買い出しに行かなくちゃ。語の由来: 今日、郊外は地球村になっているので、自分の殻に閉じ籠ってはいけないうし、訳が分からないと言っているもいけない。仏語も、クレオール語も、マグレブのアラビア語も、アフリカの諸言語も、同じように混ぜ合わせる。だから、「何もない」は、マリの中心言語であるバンバラ語の「何もない」を意味する「il ya foyi」となる。(Lexik des cités, p.155)

『シテのレクシック』に出てくる語やその説明文には、フランス社会が典型的なシテ文化だと思うようなものも少なくない。それはある意味で当然だし、カンデ自身もその点は認識していると思われるが、それでも彼女は文化的混淆性の側面を強調する。この彼女の意志を尊重して、筆者もそれに相当する箇所を紹介した。

いずれにしても、カンデにとってシテ言葉の仕事には大きな収穫があったようで、尊敬できる人として、彼女と同じマリ系でモントリュニに住み、起業家で市議会議員の女性とともに、「ペルミ・ド・ヴィーヴル・ラ・ヴィル」の代表であるチリ系の女性を挙げている。もちろん、「ペルミ・ド・ヴィーヴル・ラ・ヴィル」の活動にも参加し、シテの少年少女を手助

けし、それがきっかけで、社会活動に関心を抱くようになったし、なにより「ソーシャルワーカーとしての仕事によって、私達は自分の価値を認められ、自信が付いた (p.72)」と語っている。

カンデは、文化の交流も評価していて、マリとフランスの「2つの文化が自分に多くのことを与えてくれる (p.124)」と述べている。そして2つの文化は彼女自身のアイデンティティの基礎になる。

フランス人としては、政治参加を重視し、「投票することは物事の変革に参加することで、それがスタートであり、市民であること (p.114)」と述べる。フランスでは、選挙は登録制であり、選挙に行く以前に、登録を済ませなければならない。カンデは選挙をフランス市民の義務のように感じている。

一方、マリ人としては、文化的アイデンティティを押し出し、差別主義者に論ず箇所、「敬意を持たないなら、他人に敬意を持たなければならない。これはマリ文化に深く根ざしたこと (p.77)」と言う。また、年長者に対する尊敬もマリでは重要で、「高齢の人と話すことは好きだし、経験や助言を教えてもらえると、参考になる (p.224)」と話す。そして、フランスとアフリカを家族の点から比較する。

ここでは高齢の人は排除され、孤立しているが、反対にアフリカでは、高齢の人はとても尊敬され、知力や賢明を意味する。(…) 子や孫と一緒に暮らし、年少者に語り掛け、人生について話し、教養のために祖先に言及する。(p.224)

フランスにしても、マリにしても、場所に固有の文化がある点を示唆させるが、それは本質主義的な発想というよりも、フランスの長所とマリの長所をそれぞれ選出するという混淆的な発想と捉えた方がいい。同時に、こうした言説は、マジョリティ社会とアフリカ系の多い郊外団地を比較する視点から、フランスとアフリカを比較する視点へと、スケールを大きくする役割を果たしている。

カンデの恋人は、文脈から言って、おそらくヨーロッパ系フランス人のようで、「自分もフランス人だけど、2つの文化を混ぜるのは興味深い (p.186)」と述べている。それでも、恋人をマリへ連れて行き、そこでの生活を見せると、恋人はマリのホスピタリティを気に入ったという。双方の文化を行き来しながら、決してマリ文化を忘れない姿勢が見て取れる。

カンデは、『シテのレクシク』の制作以外に、もう1つ大きな仕事をしている。すなわち、2006年に「ミス・マリ・フランス」に選ばれたが²⁵⁾、それをきつ

かけとして、「ミス・マリ・フランス」を組織する「ドゥズィエム・ジェネラシオン Deuxième Génération」という社会団体に参加し、運営を手伝った。「ドゥズィエム・ジェネラシオン」は、郊外団地の若者を支援する「ペルミ・ド・ヴィーヴル・ラ・ヴィル」と似た存在で、フランスでのマリ人のイメージを向上させる目的で設立されている²⁶⁾。ところで、2007年の『シテのレクシク』に比べて、2006年の「ミス・マリ・フランス」のことを、カンデはあまり語らない。美の基準は相対的なものに過ぎず、ミスコンテスト自体にも疑問の声が少なくないからだろうか。しかし、次のように、間接的に述べている。「美しい女性であることは利点で、その魅力を使えるようにならなければいけない (p.241)」。つまり、自分自身に利点があっても、それを活用する能力がなければ、利点にはならない。これは郊外の若者に対して、厳しい社会的状況から脱却するための方法を示唆しているのだろう。

3. シンファンテの場合

シンファンテは、他のアラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者と同じように、郊外団地とブルジョワ郊外が異なることを認める。しかし、興味深いのはその差異の在り方だ。一般には、貧しい郊外団地と豊かなブルジョワ郊外という対比がなされるが、シンファンテは表面的な対比ではなく、対比の背景にある構造に着目し、「ヌイイに暮らす人々は、そこが美しい場所だから選び、(…) 郊外団地、HLMのタワーの暮らす人々は、その場所を選んだわけではない (p.38)」と発言している。居住地の違いが問題なのではなく、自分自身で居住地を選べる階層と選べない階層がある点が問題という見方は鋭い。ヨーロッパ系にも同じ見方をする若者がいる。リュカは、フランスの多文化社会を誇りとし、反ルペンのデモに参加し、ブルジョワ郊外の若者には居住場所を選ぶ機会があるが、郊外団地の若者にはその機会が無いと述べる。ただし、両者の差はその先の発言にある。リュカはブルジョワ階層の若者には他者である郊外団地の若者に対する関心がないとして、突き放すような態度を取るのに対して、シンファンテは社会を変えようとする意識を持っている。

しかし、彼女の意識で重要なことは、社会の変革を他人任せにしない点だろう。まず自分が変わることを重視する。「世界中を回って、ルポルタージュやドキュメンタリーを作る (p.101)」ことを夢と語るが、この夢は実現可能であり、インタビュー集のプ

ロフィール部分によれば、アラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者7名のうち、ンファンテだけが一般バカロレアを取得し、現実にはジャーナリストを目指している。

大学で知識を深めたンファンテは、社会の構造的な問題であっても、実は個人の考え方の中に問題がある点に気づいている。具体的な発言を示そう。パリと彼女が住むクレティユの間には壁があり、実際クレティユにはそう思う人が多いことを認めつつ、ンファンテ自身は別の発想をする。

私は早くから他の場所が見たかった。パリはエリートで美しい。違う生き方や考え方をしている。しかし、私は一部の若者と同じように、壁を感じない。(…)
壁は頭の中にあって、個人の考え方次第。(p.45)

社会の構造が不公平であっても、自分の意志と意欲で、不公平を打開できるという考え方をンファンテは示している。彼女の発言は、よく考えれば当然だが、郊外団地にも、積極的な若者がいる点を読者に知らせる効果は高い。

ヌファンテは社会の構造に不満を言うだけの若者ではない。移民系の人々の問題も指摘する。ンファンテの両親はガンビア人だが、役所の人間から雑な言葉で話し掛けられる。彼女は、これについて、「役所で働く人間が移民系のことも多く、私達の間でこのような行為が行なわれることが本当に腹立たしい(p.144)」と言い、移民系にも、想像力と思いやりの欠如がある人間が存在する点を述べる。

もちろん権力を批判する発言もある。当時大統領だったサルコジが2008年に発した「失せろ、バカ²⁷⁾」という汚い言葉には、「共和国の大統領なのにショックを受けた(p.121)」と話している。大統領は、共和国の元首であり、言葉が大切にされる政治家の中でも、とりわけ品位が求められる。場の安易な感情に左右されず、挑発的にならず、つねに理性と優美さを保たなければならない。「ここで生まれた私は、考え方も、振る舞いも、価値観も、フランス人と感じている(p.127)」と語るンファンテは、フランス市民であることを強く意識し、その意識の強さから、サルコジの態度が大統領として相応しくないことを指摘した。

フランス市民としての意識は、選挙行動にも反映される。彼女の両親は1980年代からフランスに居住しているが、滞在許可書を持っているだけで、仏国籍はない。そのため、フランス人であるンファンテは、投票権のない両親と家族内で政治の議論をし、

それを踏まえて選挙へ積極的に行く。

選挙前は、家で皆が議論するのが恒例になっている。両親は、私によく考えて投票するように望んでいる。選挙は、私達の意見を聞いてもらえる唯一の機会なので、放棄していい行為ではない。(p.116)

ンファンテは、カンデと同様に、フランス社会に同化している例だろう。しかし、同化できたのは、壁を越える強い意志があったからにほかならない。

「成功することは何か」という編集者の問いに、「より遠くを常に見据えること、日々の暮らしや自分の位置に甘んじないこと、そして旅をして、人と出会い、交流すること(p.167)」と答えている。また、ンファンテは「本を読む。とくにノンフィクションや歴史小説(p.210)」と言って、知的好奇心の重要性を指摘している。こうしたンファンテのアイデンティティは、フランス人と地球市民にある。それは、次の発言からも分かる。

私の関心は、他の国の人達と交流し、その人達の問題を知り、一緒に問題を解決すること。他の国の人達も、私達の問題を解決する案を提示してくれる。他の地域で起こっていることを参照するのは大切。(p.132)

そして、10代の頃から、複数のボランティア活動に参加し、台本を書いたり、役者になって演劇を上演したり、遊びや催し物や施設見学などを介して若者に法律を教えたり、若者自身が記事を書く雑誌を作ったり、インターネット上で見られるノンフィクションを制作するために旧ユーゴスラビアなどの国へ行ったりした。とくに、記事を書くボランティアは、その後「市民リポーターReporters Citoyens」でのトレーニングに繋がった。

「市民リポーター」とは何だろうか。公式サイトを参照してみよう²⁸⁾。報道関係の仕事に就くには、勉強しなければならないが、勉強するには資金が必要。そこで、2007年設立のインターネットメディアであるテレリブルLaTéléLibrと情報メディア関連の職業訓練学校であるEMI: École des Métiers de l'Informationは、郊外団地出身の若者に報道関係への道を開くため、3年間の無料トレーニングを2010年から実施している。これが「市民リポーター」の制度で、内容は、EMIで授業を受け、テレリブルで研修し、フランスの国内国外を問わず、自身に関係する地域のレポートの記事が映像で作ることになっている。ンファンテは、「市民リポーター」の第1期生(2010～2012年)として多くの記事を残してい

るが、ここでは1つだけ示しておきたい。

"高校は生徒の村から9km離れた所にあり、生徒は朝早く家を出て、夕方遅くなって帰ってくる。それで、昼は食事に戻れず、マンゴーの木陰で昼食の時間が過ぎるのを待っている。これはひどい"、と「ウミイ」は語る。この窮状を解消するために、当団体はサコネの高校生2人と、困難な状況にあるヴァル＝ド＝マルヌ県の高中生20人を動員する予定だ。学食建設は6ヶ月間で、若者のモチベーションと事前指導が必要になる。"ヨーロッパでも、アフリカでも、生活は厳しく、どちらにも電気ショック療法になるだろう"。計画は手続き上済んだが、財政面の強化が残っている。しかし、「開かれた心のミス・ウミイ」の女性代表は楽観的だ。"私達の試みは人々を交流させることであり、若者こそ私達の未来だから、私達がこの財産を引き受けなければならない"。(«À cœur ouvert de Créteil à Dakar», 2011.2.16, <https://www.reportercitoyen.fr/category/archives/promotion-1/>)

クレティユにあるNGO「開かれた心のミス・ウミイ Miss Oumy à Cœur Ouvert」が、セネガルで2つの支援策を計画している。その1つは「1家族に1菜園 Une famille, un potager」というプロジェクトで、フランスの家族が免税措置を受ける代わりに460€相当の農業システム一式を購入し、それをもとにセネガル側の家族が菜園を造って食糧自給を高める。もう1つは、上で紹介した高校の学食建設だ。フランス人としてアフリカなど世界各地について書くという「市民リポーター」の性格上、ンファンテには貧困や差別の記事が多く、ヨーロッパがアフリカを援助するという階層的な関係も出てくるが、それでも、この一節のように、フランスとセネガルをできるだけ並行的な関係で描こうとする姿勢も見出せる。

「市民リポーター」の経験を認められたンファンテは、自身が育ったクレティユのル・パレ団地のマグレブ系男性に関する記事をフランスの高級紙ルモンド紙に2012年10月16日付け記事として書くことになった²⁹⁾。さらに2017年10月からは、仏語圏の世界的なテレビ放送であるTV5Mondeにおいて、アフリカ関連の報道番組「ジュルナル・アフリック」のキャスターに抜擢された³⁰⁾。

V おわりに

1. 郊外の若者と先入観

『郊外の若者の自由な発言』の目的は、郊外の先入観を壊すことだった。しかし、若者の郊外観や他者観は、大きく2つに分かれていた。確かにテュラ

ムが序文で言ったように、「異なる社会階層間の先入観は簡単には消えない」。けれども、テュラムが同じ序文の中で続けたように、「他者と出会う扉を開けること」もできる。

結局、『郊外の若者の自由な発言』は、主にアラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者の見方や考え方を社会に示したものと考えられる。少なくともこのインタビュー集に関する限り、概してアラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者は、ヨーロッパ系の若者よりも、他者に対して融和的であり、異なる社会集団間の境界を越えようとする意欲が高い。これは、社会に蔓延するアマルガム、ステレオタイプ、ダブルスタンダードを是正する際に重要な点になるだろう。つまり、本当に崩さなければいけないのは、「郊外＝大型団地」、「郊外の若者＝非行に走る若者」という先入観そのものよりも、郊外団地に暮らすアラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者に積極性を認めないし、見出そうともしない社会の閉鎖的な態度なのではないか。

もちろんアラブ＝アフリカ＝アンティル系の若者には、1人1人の考え方や生き方があり、社会的な同化に繋がるものもあれば、自己の正当化に徹底するものもあるし、他者への不満に終始するものもある。しかし、そうであっても、アラブ＝アフリカ＝アンティル系の中に積極的に建設的な発言をする若者がいる点は、非常に重要だと思われる。このような若者の存在こそが、郊外団地の若者に対する見方を変えていくことになるのではないか。

2. 発言への2つのアプローチ

インタビュー集を分析してみて、課題も浮き上がってきた。要約という作業を基にした体系的アプローチを試みると、社会的な差異が明瞭になってしまう。そもそも要約とは、複雑なものを抽象化することであり、何らかの構造が明らかにできる。しかし、それが社会のステレオタイプを再生産する場合は、どう考えたらいいのか。また、そうでないにしても、若者の発言内容を民族・性別・居住地域の点から分析することは、属性による差異のイメージを再生産することにならないか。個人の多様性は、民族・性別・居住地域とは別のもののはずで、ここに分析上の自己矛盾がある。一方、若者の発言をそのまま読めば、発言が集められた意図を汲み取ることができ、発言の多様性も把握できるが、分析という作業ができなくなる。ここにもう1つの分析上の自己矛盾がある。

そこで本稿では、複数の発言を要約して体系的な構図を見出す作業と、複数の発言を比較して個々の評価を行なう作業を並行させた。体系的アプローチから始め、少しずつ比較的アプローチへと軸を移していったが、それは後者が優れているということではない。両者はあくまで補完関係にある。

今日、メディアは、社会の不公平を暴くこともあれば、現実を単純化して対立や敵意を煽ることも少なくない。また、発言する個人も、社会の先入観に絡め捕られる場合と、それを崩そうと思う場合がある。では、こうした状況に分析者はどう対応したらいいのか。『郊外の若者の自由な発言』は、メディアによるアマルガム、ステレオタイプ、ダブルスタンダードを壊す試みだが、その内容自体は、若者達の日常の思考・態度・行動を示すものになっている。第3表からも分かるように、おそらく多くの若者は、「郊外＝大型団地」、「郊外の若者＝非行に走る若者」が先入観であることを知っているし、アマルガム、ステレオタイプ、ダブルスタンダードも十分に認識していると思われる。したがって、先入観やアマルガム、ステレオタイプ、ダブルスタンダードを単に批判するだけではなく、郊外団地の若者の積極的で意欲的な発言に注目することで、郊外団地に対する姿勢を正すような機会を作る作業が、分析者には求められるのではないか。

3. インターテクスチュアリティ

本稿での分析対象は『郊外の若者の自由な発言』だったが、最後にカンデとンファンテという2人のサブサハラ系の女性に関わる別のテキストを考察した。というのも、あるテキストは、そのテキストだけで完結するものではないし、そのテキストが刊行された時点だけで論じられるものでもないからだ。過去のテキストも、未来のテキストも、相互に繋がっている。確かに、あるテキストが刊行された時には、未来のテキストはまだ存在していないのだから関係はない。しかし、分析する時が刊行より後であれば、その時点で存在しているテキストは議論の対象になる。

カンデの場合は、大きな経験になった『シテのレクシク』の内容を取り上げた。そこでは、彼女が重視する文化的混淆性が示される箇所もあった。一方、ンファンテは、インタビュー集の刊行前後に、市民リポーターとして記事を書いている。彼女の記事の内容を知ること、インタビュー集での発言をよりよく理解することができた。このように、複数のテ

キストを併せて論じることこそ、言説や発言の分析に必要なのではないか。

なお、インタビュー集では、カンデとンファンテは、ともに異なる社会集団間の壁を越えようとする若者だったが、別のテキストを読むことで、二人の違いも明らかになった。すなわち、カンデは、フランスとマリの文化が混淆することが、現代のフランスや郊外団地に見出せる価値だとみなしている。それに対して、ンファンテは、両親の出身地ガンビアを強調することはなく、フランスやアフリカを中心とした世界全体に視線を向け、普遍的な立場を取ろうとしている。カンデは、サブサハラにおいて古くから文明が栄え、王国が存在したマリの出身であることに自負があり、ンファンテは、世界の諸地域の問題を追うフランス人ジャーナリストであることに自負があるように思われる。

(首都大学東京・都市環境学部)

注

- 1) 例えば、地誌的性格の強い案内書では、郊外は新しく文化や工業が展開する場とされ、社会問題にはほとんど触れられない(滝波,2018)。したがって、すべての場面で郊外がマイナスに描かれるわけではない。
- 2) 「移民系」は「移民」と二世・三世などを含めた曖昧な概念だが、今日のフランス社会では便宜的に使われる。なお「移民系」は、国勢調査のためにINSEEが明確に定義した「移民」や「外国人」とも異なる。93県は次のように説明する(Équipe du SOD de la DSOE, 2016, p.2)。すなわち、「移民」は「外国で外国人として生まれ、フランスに来た者」で、幼くして親とともにフランスへ渡った者も含まれる。こうした人々は、後に仏国籍を取得しても、統計上は「移民」として扱われ続ける。他方、「外国人」は「仏国籍を持たずにフランスに居住する者」を指す。仏国籍を有する二重国籍者は、統計上フランス人とみなされる。このように、「移民」と「外国人」は定義が別で、重なる場合もあれば、異なる場合もある。
- 3) フランスの県は、本土内に96、海外領土に5ある。本土内の県は01～95の2桁の番号で(コルシカ島の2県のみ2Aと2B)、海外領土の県は3ケタの番号(971～974, 976)で示される。本稿では、パリ郊外の県を県番号で示す。すなわち、セヌ＝サン＝ドニ県は93県、ヴァル＝ド＝マルヌ県は94県、オ＝ド＝セヌ＝マルヌ県は92県、ヴァル＝ド＝ワーズ県は95県、セヌ＝エ＝マルヌ県は77県、エソンヌ県は91県、イヴリンヌ県は78県。各県の位置は、第1図を参照のこと。なお、パリは県かつ市で、75の番号が与えられている。
- 4) 実際は、ほぼ男性の若者を指す。この意味は大きい。本稿では性別の問題に入らない。また、本稿の最後に、個別事例として2人の女性の若者の発言を取り上げるが、そこでも性別の問題は考察しない。

- 5) フランスの代表的な時事週刊誌には、『オブス *L'Obs*』、『ポワン *Le Point*』、『エクスプレス *l'Express*』、『マリアンヌ *Marianne*』がある。政治的な傾向は、それぞれ順に、リベラル、右派、中道、左派と言える。
- 6) メインテーマ「郊外に暮らす」のサブテーマ「郊外の若者とは何か」だけは、最も重要な質問だからか、20名全員の発言が掲載されている。
- 7) パリ郊外以外の7名の居住地は、大西洋岸の44県サンテルブラン、仏北部の59県ルベ、仏南西部の33県セスタス、リヨン郊外の69県ヴィルヴァルバンヌ、仏南西部の31県トゥールーズ、南仏地中海側の13県マルセイユ、仏東部の54県リヴェルダン。
- 8) アマルガム *amalgam* は、1事例を全事例に当てはめるなど、全部を混ぜこぜにして、議論を飛躍させること。典型的な例は、イスラム過激主義者による事件で、イスラム教徒全体を批判するような場合。
- 9) イスラモフォビアの問題もある。フランスでは教育や公共の場への宗教の関与を禁じるライシテが強調されすぎるあまり、宗教への敬意や理解が無くなり、宗教がサブカルチャーのように扱われている（宮島、2016）。また、イスラモフォビアは、マグレブ系への偏見と結び付き、かつユダヤ人排撃や人種差別とは違い、見過ごされることが多い（森、2004）。ただし、『郊外の若者の自由な発言』ではイスラモフォビアは見られない。ここにも、フランスの都市や郊外に暮らす若者のリベラル志向が認められる。
- 10) 正式な名称は、ヌイイ=シュル=セーヌ（セーヌ川沿いのヌイイの意）。93県にはヌイイ=シュル=マルヌ（マルヌ川沿いのヌイイの意）があるが、一般にパリ周辺で「ヌイイ」と言えば、92県のヌイイを指す。なお、仏語では、「パリジャン（パリ市民）」、「フランシリアン（イル=ド=フランス地域住民）」、「フランス（フランス人）」など、市町村や地域や国の人々を示す表現（*gentilé*）が慣習的、文法的に決まってい、92県のヌイイ市民は「ヌイエアン *Neuilléen*」、93県のヌイイ市民は「ノセアン *Nocéen*」となる。
- 11) メインテーマ「政治・市民権」のサブテーマ「投票しますか。2012年は投票しますか」および「最も驚いた政治的出来事は」から読み取れる政治的傾向は次のとおり。具体的に投票先を述べているものに限れば、アラブ=アフリカ=アンティル系では、左派3名、郊外のマイノリティのための少数政党1名、ヨーロッパ系では、左派3名、右派1名となっている。また、驚いた政治的出来事も、具体的に述べているものに限れば（複数回答あり）、アラブ=アフリカ=アンティル系では、2002年大統領選の決選にルペンが残ったこと3名、2008年のオバマ大統領の誕生1名、2005年の郊外暴動1名、2008年のサルコジの暴言1名、ヨーロッパ系では、2002年大統領選の決選にルペンが残ったこと3名、2008年のオバマ大統領の誕生2名、2010年～2011年のアラブの民主化運動1名、2007年の仏大統領選1名となっている。なお、ルペンの台頭にはほぼ全員が不安や危険を感じ、オバマ大統領の誕生には多くが新しい時代の可能性を感じている。
- 12) 2017年大統領選の第1回投票では、ルペンの得票率

はパリで4.99%、92県で7.64%にまで下がった。93県は13.59%、94県は11.50%、78県は12.92%で変わらず、91県だけ16.43%で、少し上がった。

(<https://www.interieur.gouv.fr/Elections/Les-resultats>)。

- 13) 「元々のフランス人」は、曖昧な表現だが、今日のフランスのメディアではよく使われる。古代には、現代のフランスに当たる地域に諸々の先住民がいた。そこへBC500年頃に中央ヨーロッパのケルト人が流入して混血し、当該地域の人々はローマ人からガリア人と呼ばれるようになった。さらに、ローマはBC100年頃にガリアへ進出し、ローマ文化を持ち込み、ガリア人とも混血した。その後、AD500年には北東からフランク人が入り、混血も起こった。中世期頃までに成立した民族を想定して、「元々のフランス人」と呼んでいる。ケルト人、ガリア人、フランク人などについて、詳しくはド・プラノール（2005）を参照。
- 14) これを示すことは、本稿の分析が妥当かどうかを第三者が判断する余地を与えるし、郊外の若者の意識を紹介する機会にもなると考える。なお、日本のフランス研究で、詳細に発言を紹介し、解説や考察を加えたものとして、園部（2009）や中條（2010）がある。具体的な内容が示されているので、さらに分析することもできる。
- 15) フランスでは、信じていると言うだけの人を「信仰者 *croyant*」、積極的にミサに参加したり、ラマダンを行なったりする人を「実践者 *pratiquant*」と呼ぶ。
- 16) 「ホットな郊外 *banlieue chaude*」とは、「危険な郊外」、「難しい郊外」、「激ししやすい郊外」などの意味。
- 17) 93県の発音は「カトルヴァン・ヌフ」だが、アラブ=アフリカ=アンティル系の若者を中心に「9-3（ヌフ・トロワ）、日本語風に表わせれば「キュウ・サン」と言う。詳しくは滝波（2014, pp.73-123）を参照。
- 18) 第3、4、5表から分かるように、9-3はヨーロッパ系の若者だけが、ヌイイはアラブ=アフリカ=アンティル系の若者だけが、事実上語っている。というのも、ヨーロッパ系のシャルロットがヌイイに言及するのは、自身の居住地だからで、そうでなければ本人の他の発言内容から見て、述べなかった可能性が高い。また、アラブ=アフリカ=アンティル系のサイドは9-3のことを説明しているが、それは過去の話で、今は9-3の特異性を否定しているので、9-3への強い意識はない。したがって、9-3が郊外団地の典型例、ヌイイがブルジョワ郊外の典型例だとしても、こうしたステレオタイプを持ち出すのは、それと関係しない集団だと言える。もちろん、アラブ=アフリカ=アンティル系の集住するシテは93県に限らず、91県、94県、95県など広く分布しているので、93県の住民でなければ、あまり93県のことは持ち出さないという理由も考えられる。同じように、ヌイイも、ヨーロッパ系にとってはブルジョワ郊外の1つにすぎない。
- 19) 若者が場所に言及する際、イメージを述べる場合、自身が住む実際の場所を念頭に置く場合、自分が住む場所も含めて説明する場合、自身の経験で語る場合、自分も含めた社会集団としての経験で語る場合などがあるが、すべての場合を考察の対象とする。

- 20) ヨーロッパ系のリュカも、第3表に示したように、今日のフランスに見られる多文化的性格をフランスの誇るべきものとしている。
- 21) パリのシャトレ界限は、若者向けの店舗が多く、郊外の若者が遊びや買物に出掛ける場となっている。
- 22) 書誌情報は次のとおり。Équipe Permis de Vivre la Ville, *Lexik des cités*. Fleuve Noir, 2007, 363p.
- 23) 当団体の活動は <http://banlieues-creatives.org/portfolio-items/permis-de-vivre-la-ville/> で説明されている。なお、「Permis de Vivre la Ville」という名称は、「運転免許証 permis de conduire」に引っ掛けて、「町の生活証」の意味を持たせていると思われる。
- 24) 「auch」は「chaud (難しい／危険な)」, 「ouf」は「fou (クレイジー)」, 「vénèr」は「énervé (いらいらする)」の逆さ言葉。「blédard」は「アラブ人」, 「kiffer」は「好む」, 「wesh」は「よう／やあ」の意味。「galère」, 「poto」, 「t'as vu ?」は、それぞれ仏語では「ガレー船」, 「柱 poteau」, 「分かった? tu vois ?」が基にあるが、転じて、「友達、奴」, 「困難」, 「だろ／だよね」となる。「bad」は英語の否定的な意味ではなく、「いい／すごい」という肯定的な意味になる。「moika」は、アンティル人がクレオール語で「Mwa ka fé ça (私はそれする)」, 「Mwa ka di ça (私がそう言う)」と言うので、「アンティル人」の意味になった。「t'inquiète」は、正式な仏語の「Ne t'inquiète pas」, 口語の「t'inquiète pas」と同じで、「気にするな」の意味だが、シテ言葉では「t'inquiète (文法上ありえない形)」となる。以上、詳細は『シテのレクシク』を参照。なお、「t'inquiète」は、携帯メールなどでは、「tkt」と省略されることもあり、一般人が使う「a+ (またあとで)」や「a2min (また明日)」と同じ類と言える。シテ言葉と俗語、若者言葉、携帯メール語は重なり、シテ文化は現代フランス文化の一部になっている。
- 25) カンデの「ミス・マリ・フランス」のことは、パリジャン紙の記事 (<http://www.leparisien.fr/essonne/kande-19-ans-elue-miss-mali-la-piscine-rouvre-enfin-conseil-municipal-ce-soir-la-foret-de-senart-entame-sa-resurrection-13-12-2005-2006556963.php>) にも掲載されている。
- 26) *Paroles libres de... jeunes de banlieue*, p.213-214.
- 27) 2008年2月23日の国際農業フェアで、訪問者の1人に「触るな、汚らしい」と言われ、サルコジは「失せろ、バカ」と反応した (Olivier Beaumont, «L'algara de de Nicolas Sarkozy fait polémique», *Le Parisien*, 2008.2.23 - <http://www.leparisien.fr/politique/l-algara-de-de-nicolas-sarkozy-fait-polemique-23-02-2008-3296079605.php>). 郊外の若者の言動を批判しながら、自身も同じことをした結果、サルコジは大統領に相応しくない資質、つまり冷静さと包容力の欠如を示してしまった。
- 28) <https://www.reporter-citoyen.fr/>での説明による。
- 29) ンファンテが執筆した新聞記事は、「テレリーブル」のサイト (<http://latelelibre.fr/2012/10/17/premier-article-de-nfanteh-dans-le-monde/>) で紹介されている。
- 30) <http://presse.tv5monde.com/nouvelle-formule-pour-le-journal-afriquedes-le-29-octobre-a-21h30-sur-tv5monde/>

文 献

- 荒又美陽 (2011): 移民と社会問題。加賀美雅弘編:『EU』(世界地誌シリーズ3) 朝倉書店, 64-74.
- 磯 直樹 (2013): パリ郊外における柔道実践—暴力と境界の問題をめぐる。スポーツ社会学研究, **21**(2), 63-78.
- 園部裕子 (2009): 翻訳 僕はハレド・ケルカルーテロ容疑者になった移民の若者のライフストーリー。香川大学経済論叢, **82**(1/2), 169-191.
- 滝波章弘 (2014):『〈領域化〉する空間—多文化フランスを記述する』九州大学出版会, 317p.
- 滝波章弘 (2018): 雰囲気言説に関する計量テキスト分析—フランスの案内書にみるパリの市域と郊外。理論地理学ノート, **20**, 27-54.
- ド・プラノール, G. 著, 手塚 章・三木一彦訳 (2005):『フランス文化の歴史地理学』二宮書店, 534p.
- 中條健志 (2010): フランスのメディアにおける「若者」の語り—「暴動」をめぐる「排除」の言説。都市文化研究, **12**, 2-11.
- ベン・ジェルーン, T. 著, 高橋治男・相磯佳正訳 (1994):『歓迎されない人々—フランスのアラブ人』晶文社, 204p.
- 宮島 喬 (2016): ポピュリズム政治と「移民問題」。UP (東京大学出版会), **528**, 1-6.
- 森千香子 (2004): フランスにおける「イスラームフォビア」の新展開とその争点。日本中東学会年報, **20**(2), 323-351.
- 森千香子 (2016):『排除と抵抗の郊外—フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会, 325p.
- Équipe du SOD de la DSOE (2016): *La population étrangère par nationalité en Seine-Saint-Denis: état des lieux en 2011 et évolution 2006-2011*, Décryptage(s), n°2, Service de l'Observatoire Départemental de la Direction de la Stratégie, de l'Organisation et de l'Évaluation, du Département de la Seine-Saint-Denis, 43p.
- Gilli, F. (2018): C'est Paris, aussi, qui doit s'intégrer à sa banlieue. Paroles d'habitants sur la formation du Grand Paris. Bacqué, M.-E., Bellanger, E. et Rey, H. (dir.): *Banlieues populaires: territoires, sociétés, politiques*. L'Aube, 287-299.
- IFOP (2012): *Premier tour de l'élection présidentielle 2012: profil des électeurs et clés du scrutin. Sondage jour de vote 22 avril 2012*, IFOP, 73p. <https://www.ifop.com>
- Jacquemin, H. (2005): Les risques en quartier «sensible»: des mythes médiatiques aux réalités quotidiennes. L'exemple des Aubiers à Bordeaux. *Mappemonde*, **77**, 1-9, <http://mappemonde-archives.mgm.fr/num5/articles/art05107.html>
- Jacquemin, H. (2006): L'insécurité vécue dans un quartier d'habitat social. L'exemple des Aubiers à Bordeaux. *Sud-Ouest Européen: Revue Géographique des Pyrénées et du Sud-Ouest*, **22**, 89-101.
- Le Moigne, Y., Smithsimon G. et Schafraan, A. (2016): Ni la race ni le 9-3 ne sont ce que nous croyons qu'ils sont. *Hérodote: Revue de Géographie et de Géopolitique*, **162**, 99-124.
- Truong, F. (2012): Au-delà et en deçà du Périphérique: circulations et représentations territoriales de jeunes habitants de Seine-Saint-Denis dans la métropole parisienne. *Métropoles*, **11**, 1-33, <https://journals.openedition.org/metropoles/4568>